JUNK7
Darkside story of DEAD OR ALIVE & SAMURAI SPIRITS
Illustrated by FUKAMI NAOYUKI
Chill-Out Presents
2005 Winter

JUNK7

Chill-Out Presents for Adult only

CONTENTS

5~24　雪月華

25~34　哀虐乃巫女

35~51　狂宴乃巫女

52　後書き＆奥付

JUNK7 Chill-Out Presents for Adult only

霊峰
御影山麓――

陶艶峡穴（とうえんきょうけつ）――

くくく…気は確かか？

父親違いとはいえ同じ腹から産まれた姉の始末を――

我ら陰の天神流…封神門の衆に依頼するとは…

それが何を意味するのか…知らぬ訳ではあるまい？我らの「やり方」を

……

深山の女天狗――いや、霧幻天神流覇神門の娘「あやね」よ

わ、分かってるわよそんな事より…

あの女――「かすみ」の始末は確実に遂行してもらえるんでしょうね

抜け忍とはいえ天神流頭首にも選ばれたその実力…侮れないわよ

くく…案ずるな過去三百余年の歴史において

我ら封神門の衆に狙われ永らえた者はただの一人も存在しない

たとえその相手が霧幻天神流第十八代頭首だとしてもだ

たじっ

…だが代価は必ず支払ってもらうぞ

この私がここまで気圧されるなんて

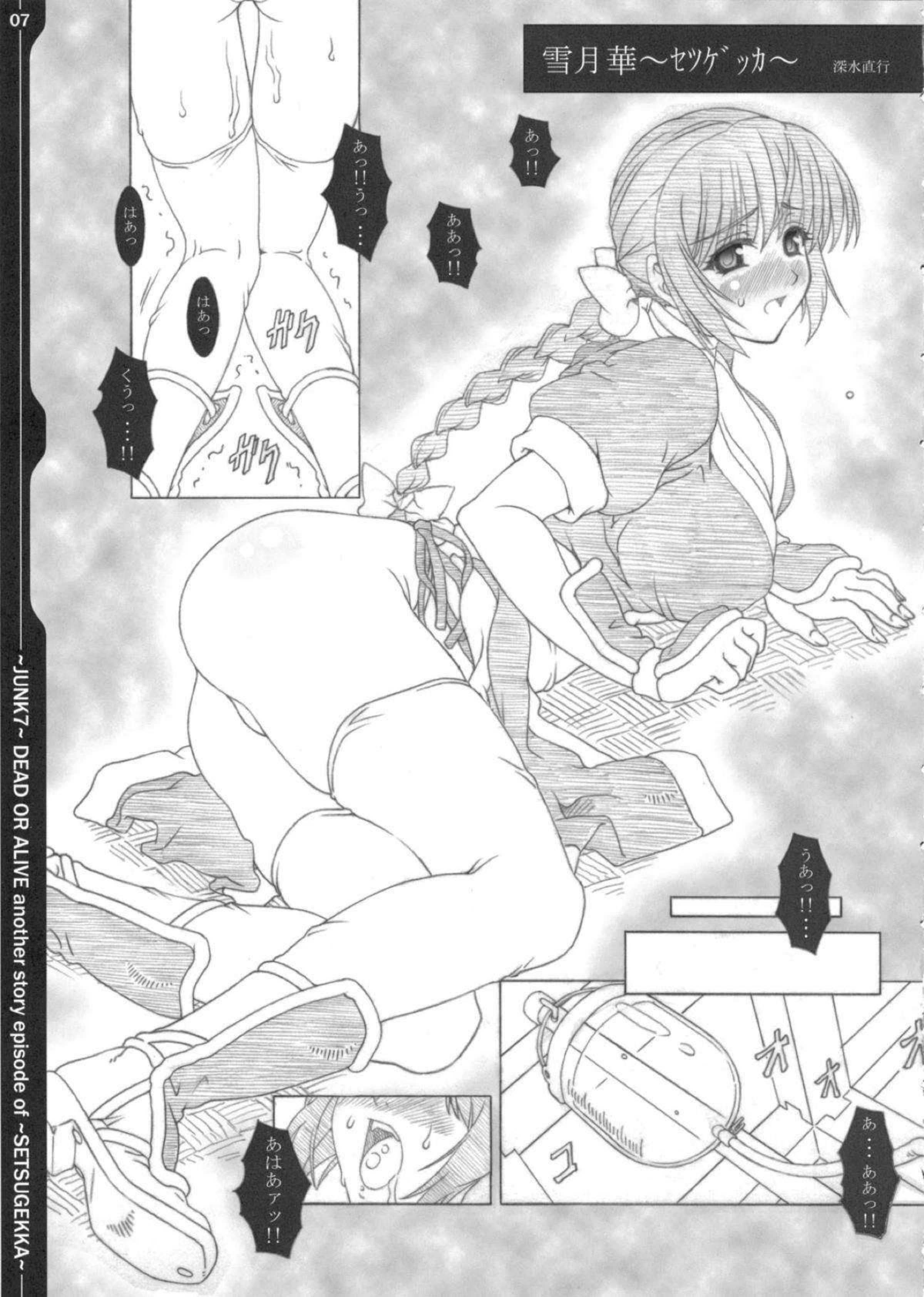
く…っ 凄い威圧感

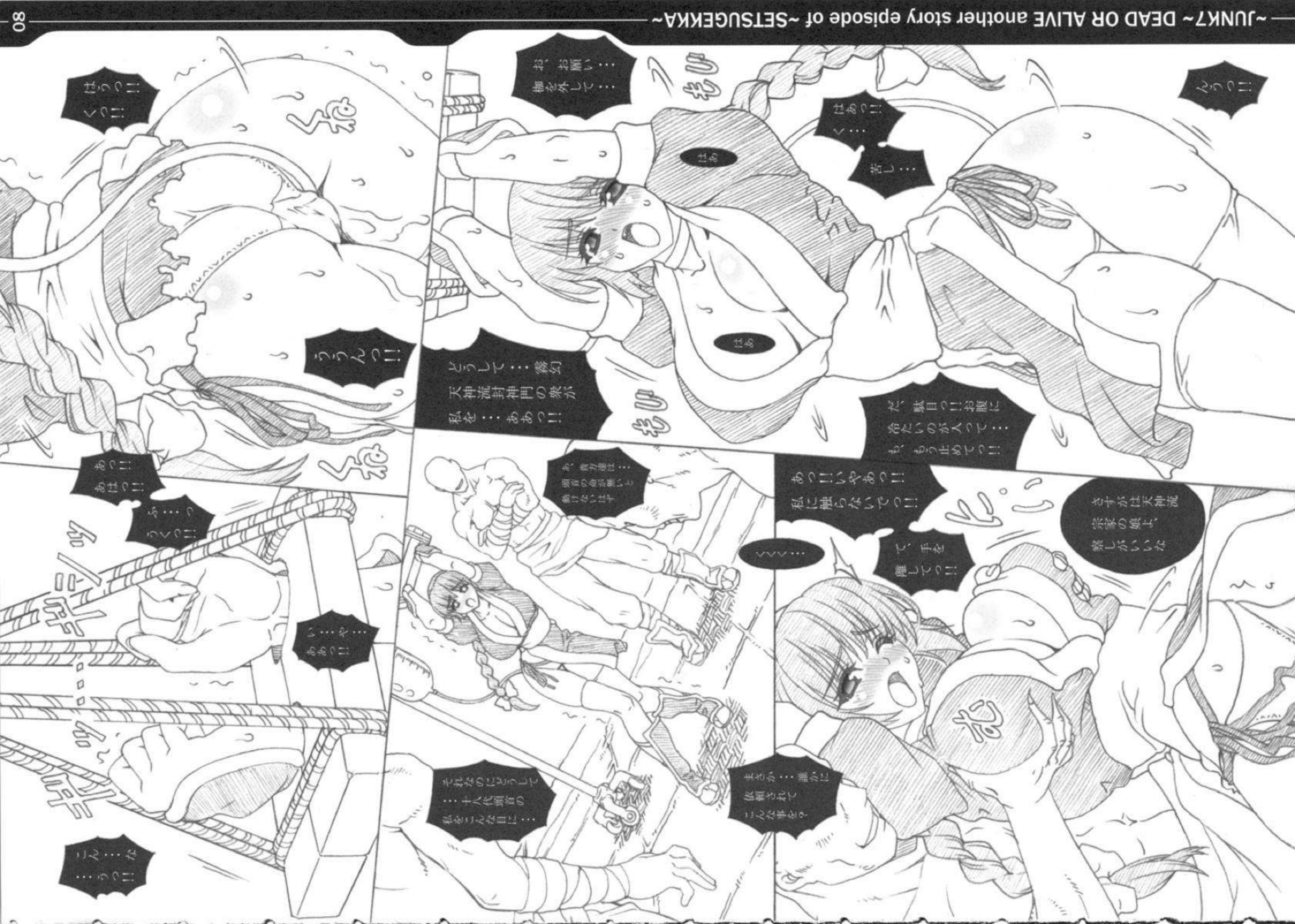
お前達姉妹の血肉をもってな…くくく…

ははははっ!!

雪月華～セツゲッカ～

深水直行




…ハ…
…ハ…
…ハ…

我らにお前の始末を頼んだのは剛神門の「あやね」だ

くっくっ

報償として己の身を差し出す事を条件にな……全く

女の嫉妬心とは恐ろしいものよ

ブルブル

そ、そんな……あやねが……

あっ!!い、いやあっ!!

たぷんっ

いやっ!!や、やめてっ!!

ああっ!!

何に世よ頭首の身でありながら抜け忍となったお前の事だ

ムニッ ムニッ

はあ

はあ

あはっ!!

はあっ!!

むぅ、胸を……揉まないでっ

はあ

はあ

我らが手を下さずともいずれ刺客に命を狙われる事になっただろう

くりっ

くりっ

駄目っ!!ち、乳首摘んじゃ……あ……ああっ!!

ビクッ

ビクッ

コリッ コリ

乳首つねっちゃ……うっ!!だ、駄目えっ!!

はあっ

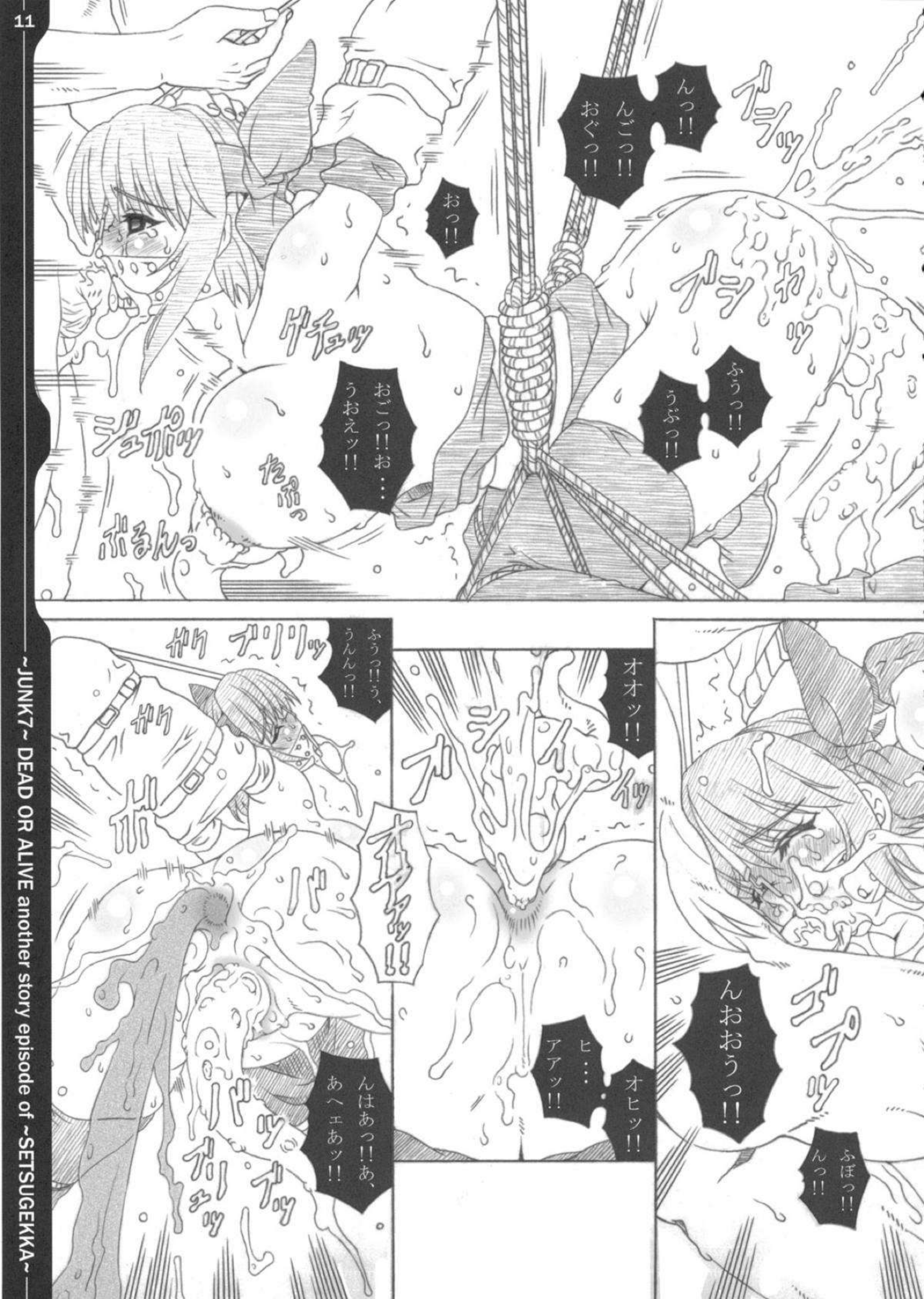
はあっ

だが安心しろ、我らの慰み者としておとなしくここで飼われていればお前の命は守ってやる

あはっ!!あっち、乳首いっ!!

あの女の様にな

ああ…な、なんて酷い事を
オフッ!! フウッ!!
ゴポ
オッ!!
オゴッ!!
フー
フー
あやねっ!!
フオッ!!…オ…オオッ!!
チュポッ
ビクッ
ビクッ
フオッ!! オッ!!
ガクッ
アッゴオオッ!!
ズチュ
ズチュ
ズチュ


んっ!!
んごっ!!
おぐっ!!
おっ!!
ふうっ!!
うぶっ!!
おごっ!!お…
うおえッ!!
ふうっ!!う、
うんんっ!!
オオッ!!
オヒッ!!
ヒ…
アアッ!!
んおおうっ!!
ふぼっ!!
んっ!!
んはあっ!!あ、
あへェあッ!!

蠱毒の呪法を始めとして我ら封神門は蠱術を駆使する流派

ビチビチ

要人暗殺に用いるものから治療に使うものなど様々な蠱を飼っていてな

ブッ

ブビッ

オ…ッ

オオッ…

特にお前達の様な極上の美姉妹のものはこいつらにとって格別の馳走だ

その蟲共の餌となるのが生き物の排泄物…とりわけ若い娘の汁を好むのよ

くくく…かすみよ、妹と同じくお前からもたっぷりと搾り取ってやる

い、いやっ!!そんな事…っ

あっ!!いやあっ!!触らないでっ!!

はあ

はあっ!!

はあ

ああっ!!そ、そんな所…

くりっくり

ビクッ

レロォ

あ…っ!!ああっ!!

コラッ

コラッ

うあっ!!ああっ!!

あっ!!

ビク

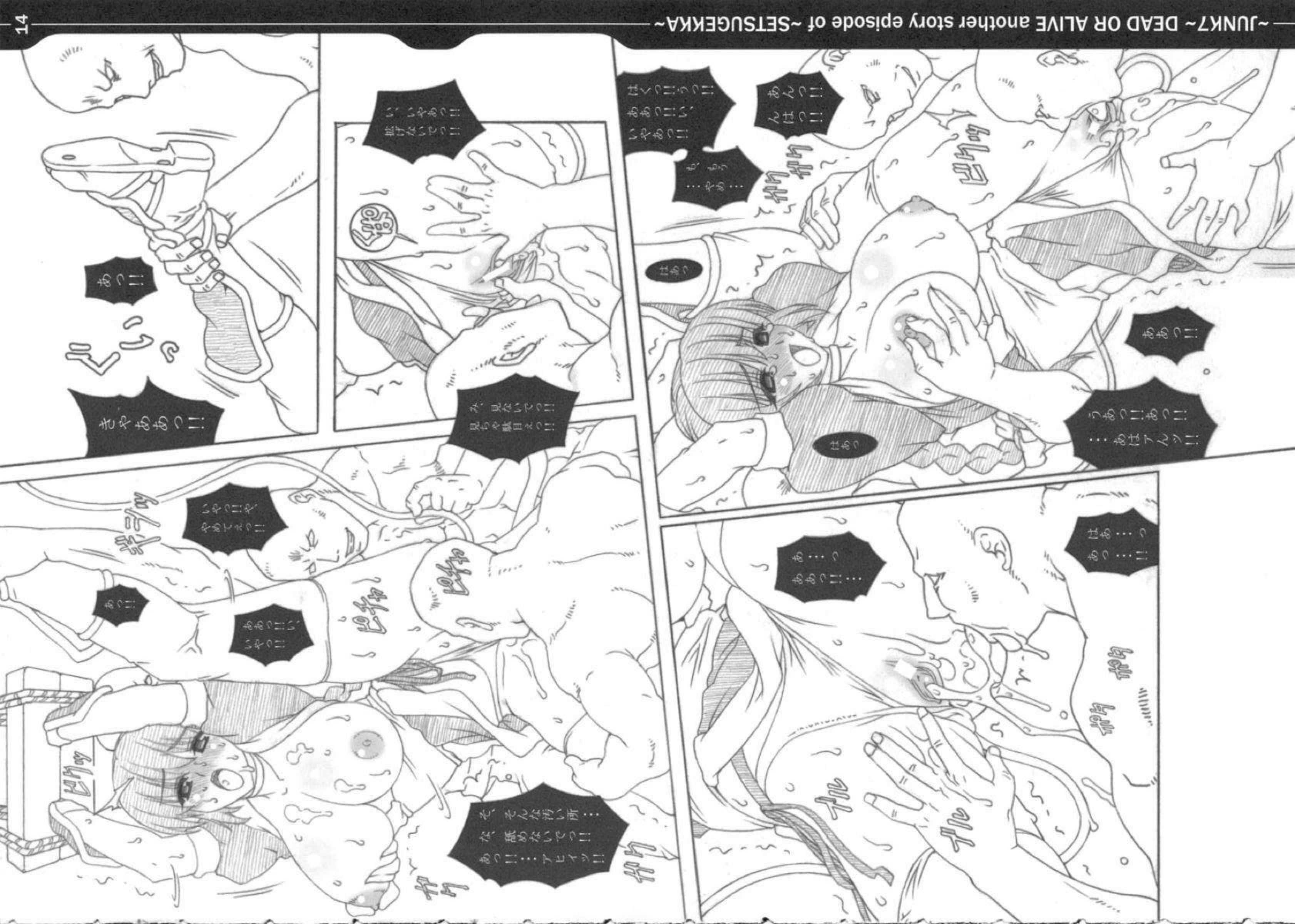
ビクッ

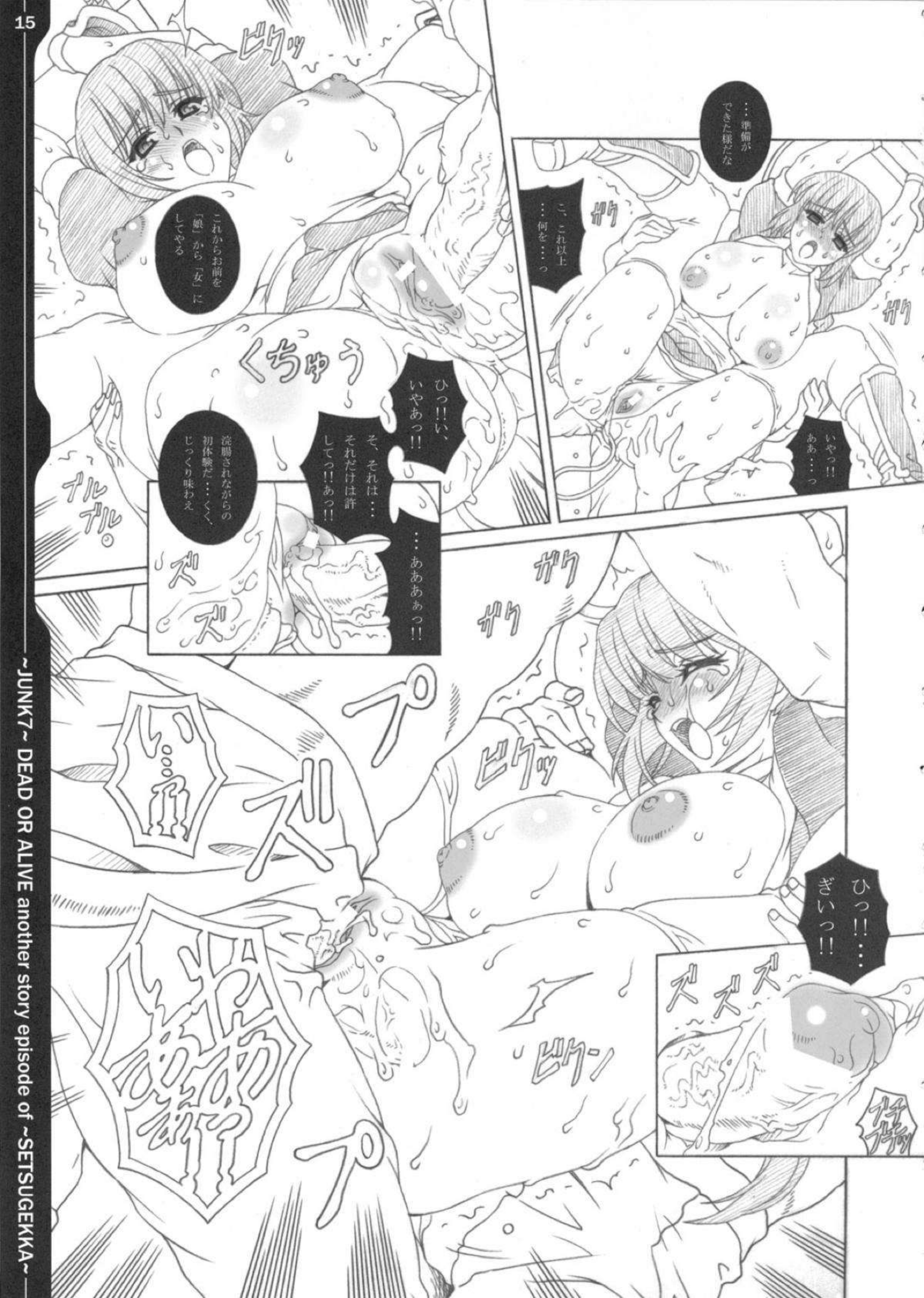
はぐっ!!うっ!!く…う…お、お腹が…っ!!

くるっくるっくるっ

う…っ!!くうっ!!

いやあっ!! あ…ああっ
か、枷を外してっ
はあっ
はあっ
ガク
ガク
ぐね
お、お腹が…苦しい…っ!!
ぐね
あっ!!
アヒッ!!ち、乳首い…っ
あ…はあっ!! あうんっ!!
あくっ!!
お、お願い…止めてエッ!!
ぷぴ
ぷぴ
うあっ!!あっ!! も、もう入れないで…っ!!
おっ ぐっ ト、トイレ…に…行かせて…っ
うっ…はあっ
ガクッ
ああっ お、お願いっ
トイレに行かせてえっ
ビクッ
ガクッ
くくく…天神門の白桜と称される最高の美姫が糞を我慢して悶える姿か…なんという艶めかしさよ
やはり女は恥辱に耐える姿こそ美しい
これからたっぷりと時間をかけてお前を浣腸の虜にしてやる
我らの慰み者…糞汁をひり出す蟲の餌袋に成り果てるがいい
な、なんて恐ろしい事を…っ
そ、そんな事絶対にいやっ!! いやですっ!!
はあ
はあ

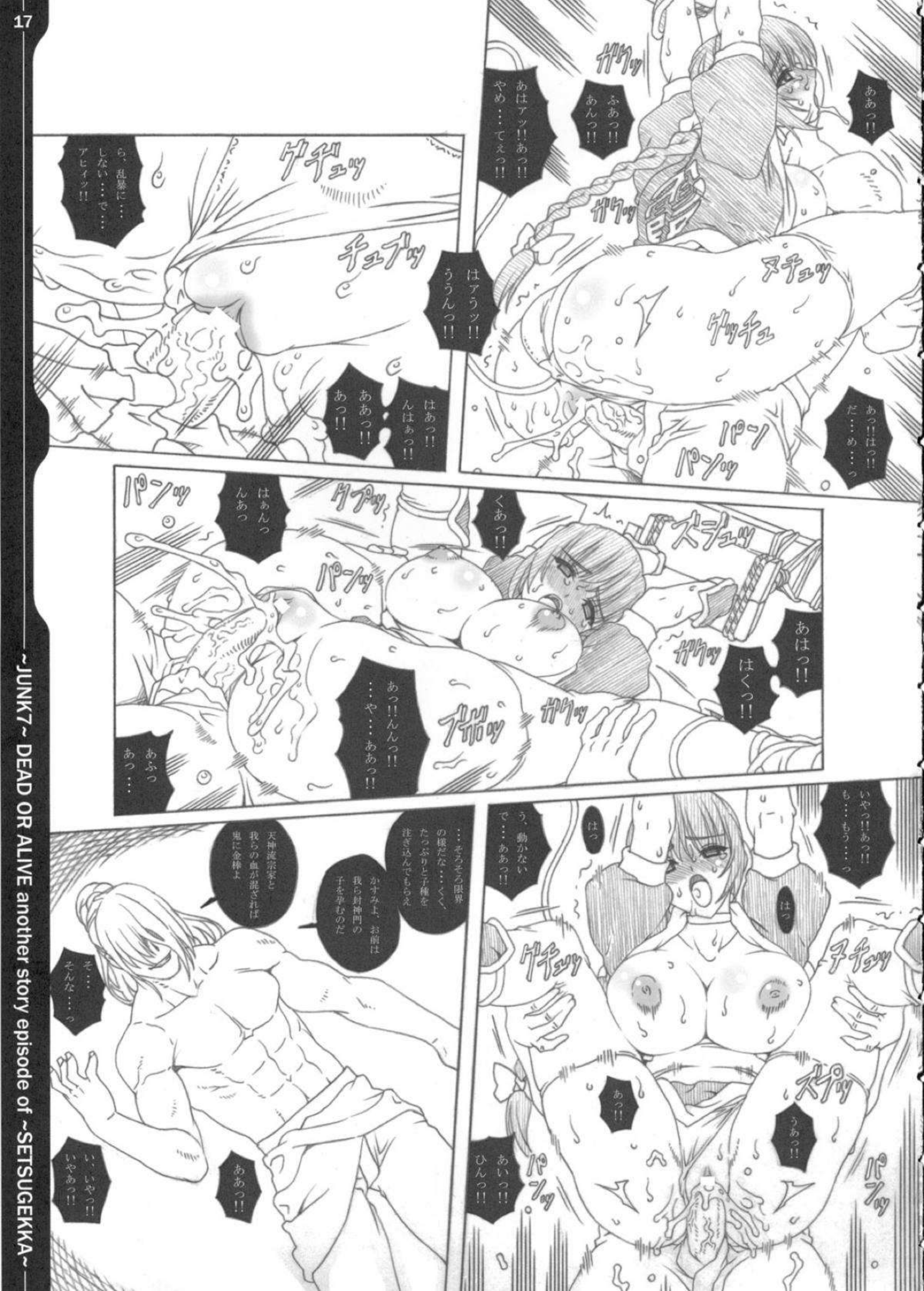

ドサッ
ドサッ
ドサッ

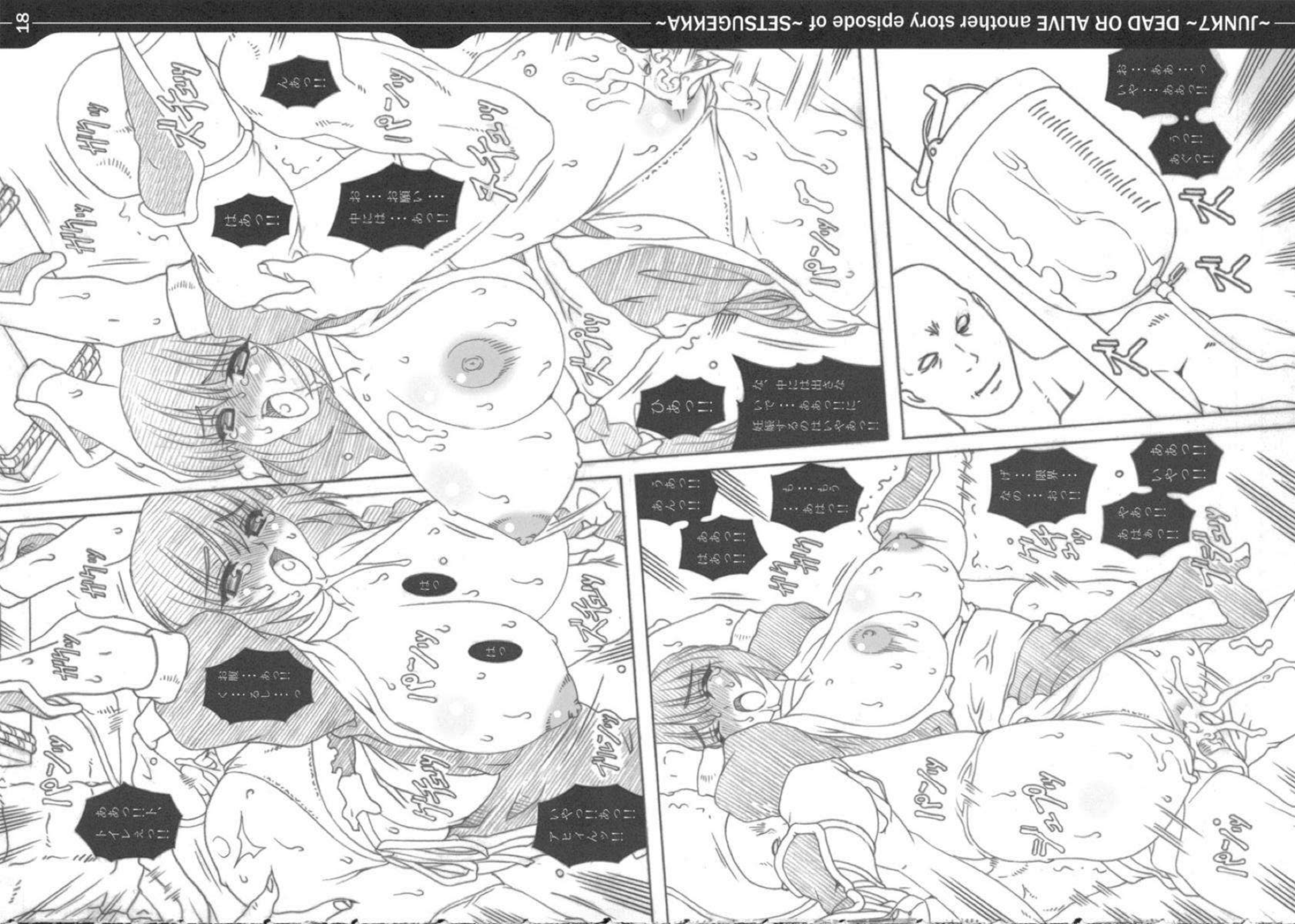

…準備ができた様だな
ガク
ガク
こ、これ以上…何を…っ
いやっ!!ああ…っ
ビクッ
これからお前を「娘」から「女」にしてやる
くちゅう
ひっ!!いいやあっ!!
そ、それは…それだけは許してっ!!あっ!!
浣腸されながらの初体験だ…くく、じっくり味わえ
ブルブル
ズズ
…あああぁっ!!
ガク
ガク
プ
ビクッ
ズズズ
ひっ!!…ぎいっ!!
ビクッ
ガク

あっ!!
あっ!!いっ!!痛っ!!やあっ!!
う、動かないで…っ!!
いっ!!あっ!!痛…いっ!!
あぐっ!!
あ…っ!!ああっ…

アヒッ!!あっ!!
ひあっ!!ひんっ!!
いやっ!!あっ!!あはあアッ!!
うあっ!!

はあっ!!あっ!!どう…して…ああっ!!
うあっ!!お、お腹ぁ…
あ、熱く…なって…あっ
い、痛いだけ…だったの…に…
はヒッ!!ひインッ!!
あはっ!!
あんっ!!


ああっ!!
ふあっ!! あんっ!!
あはァッ!!あっ!! やめ…てえっ!!
あっ!!はっ!! だ…め…っ
はァうッ!! ううんっ!!
はあっ!! んはぁっ!!
ああっ!! あっ!!
ら、乱暴に…しない…で…アヒィッ!!
あはっ!! はくっ!!
くあっ!!
はぁんっ んあっ
あっ!!んんっ!! …や…ああっ!!
あふっ あっ…
いやっ!!あっ!! も…もう…っ
はっ
はっ
う、動かないで…ああっ!!
あっ!!
うあっ!!
あいっ!! ひんっ!!
…そろそろ限界の様だな…くく、たっぷりと子種を注ぎ込んでもらえ
かすみよ、お前は我ら封神門の子を孕むのだ
天神流宗家と我らの血が混ざれば鬼に金棒よ
そ…そんな…っ
ああっ!!
い、いやっ!! いやあっ!!

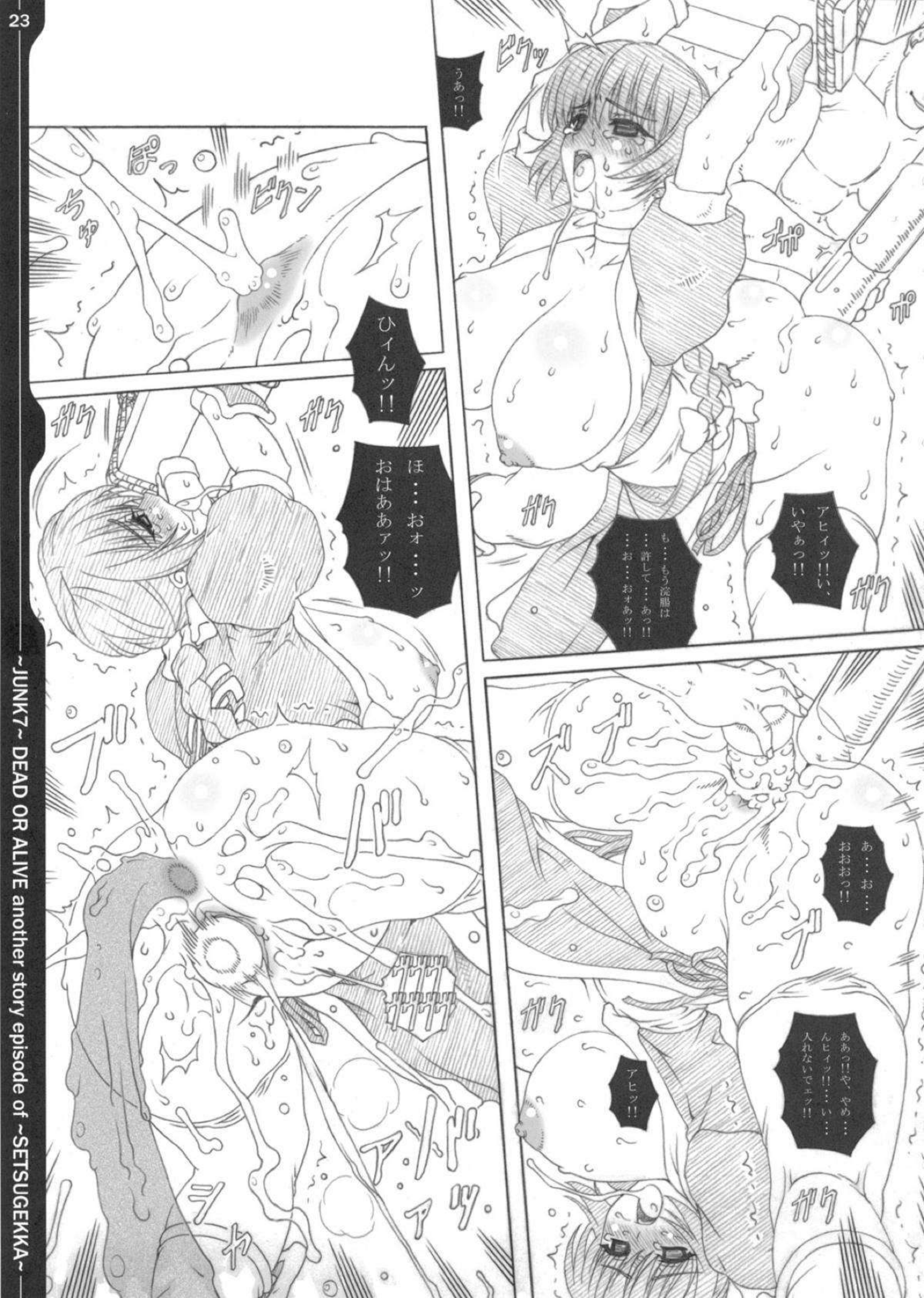

ドクン
ドクン
ドクン

ガクッ
ガクッ
ビクン
はぁんっ!!
あんっ!!
ビクッ
パーン
パーン
いやっ!!あぁっ!!
も…もう…っ
ガク
ガク
ガク
ビク
ビク
ビク
ブニュ
ブニュ

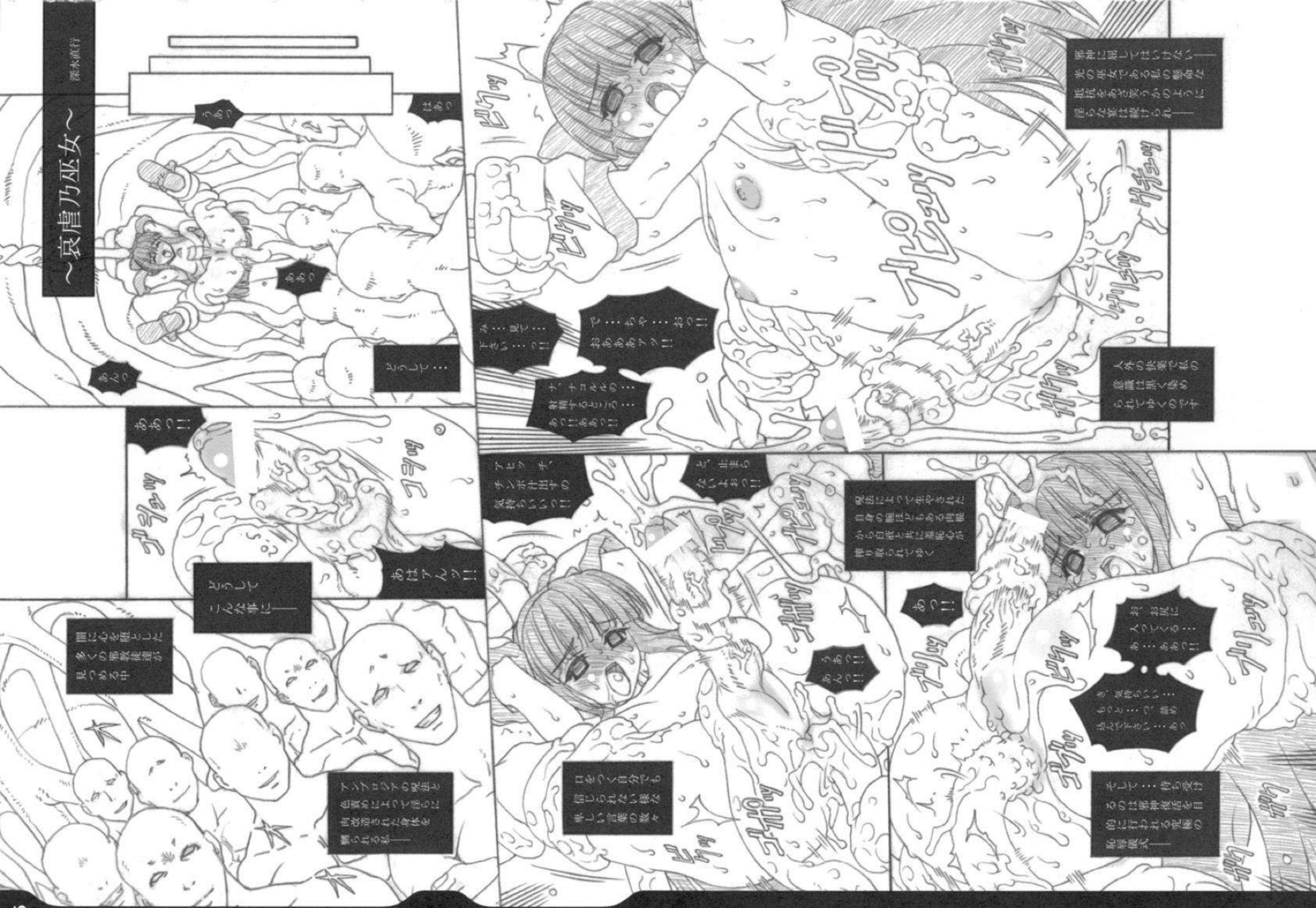
ドクン
ドクン
ドクン

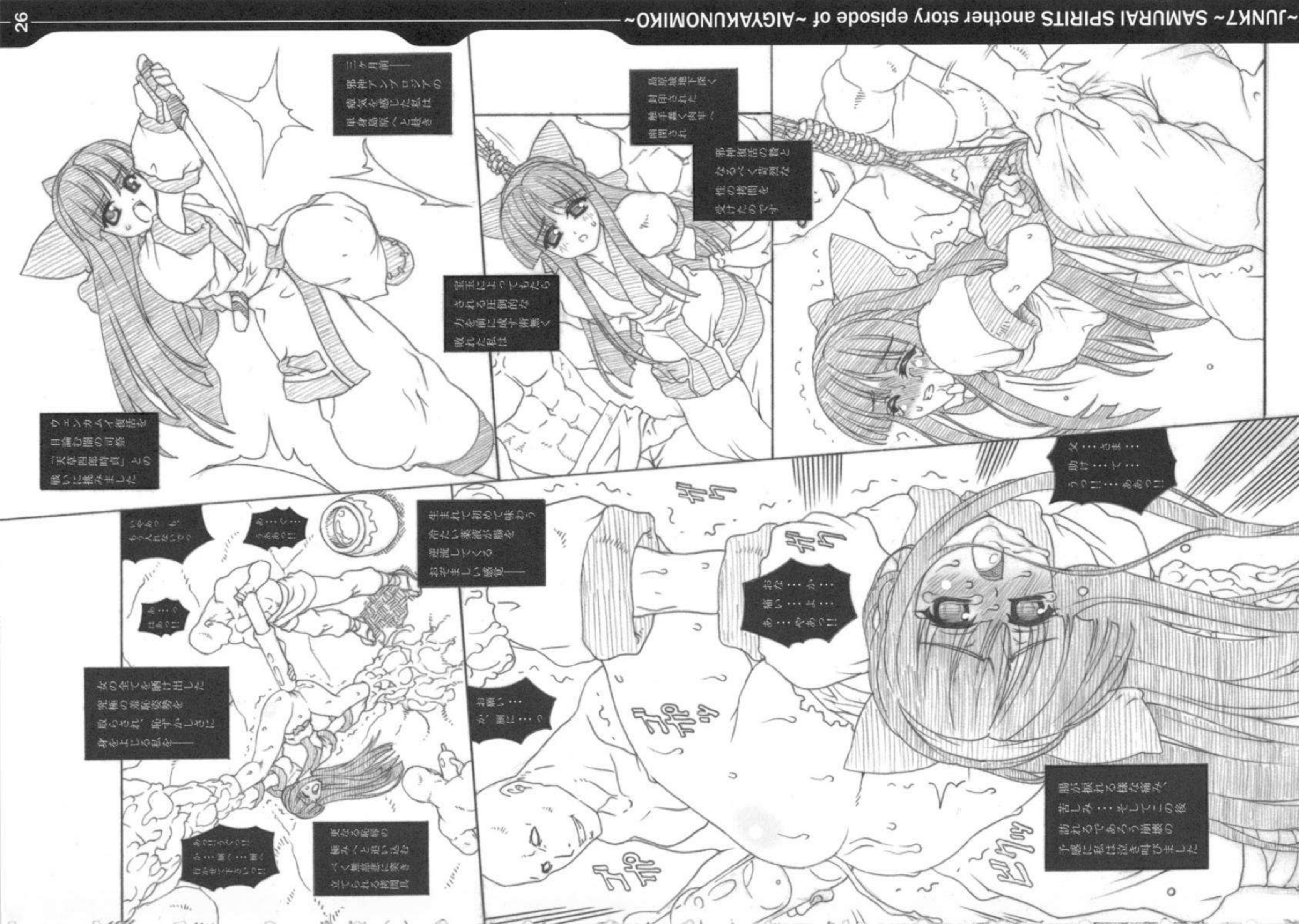
いやあっ!!で、出ちゃうっ!!
アヒィッ!!
はあっ!!
ほじっ
ほじっ
ほ、穿らないで…あはぁんっ!!
ガクッ
ガクッ
うあっ!!お、お尻だめっ!!
ビクンッ
ビクンッ
ケチュッ
ケチュッ
あぁっ!!
ガクッ
ビクーンッ
ブッ
ブリュ
ブリュ
ブリュ

ブリブリブリッ
ブリュリュッ
おお、お願いっ!!…見ないでェッ!!
おおっ!!
いやあっ!!み、見ないでっ!!
ブリュッ
ビクッ
ガク ガク
ガクッ ガクッ
ブリュリュッ
ブシャッ
あはあっ!!
ああ…っ!!
それにしても…さすがは宗家の箱入り娘よ
人前で糞を搾るのは気持ちいいか、かすみよ
ビクッ
ガク
ガク
ああっ…
ひり出した糞の臭いまで上品な香りをしているわ
いやあっ!!に、臭いを…嗅がないでぇ…
お願い…も、もうこれ以上…辱めないで…っ
ビクッ
ビクッ
ブル
ブル
はあ
はあ
あ…ああ…っみ、見ないで…お願い…
こん…な…ああ…い、いやぁ…っ
取るに足らぬ下賤の女共とは腹の中の造りからして違うのだろうな
これは極上の蠱飼が採れそうだ
ガク ガク

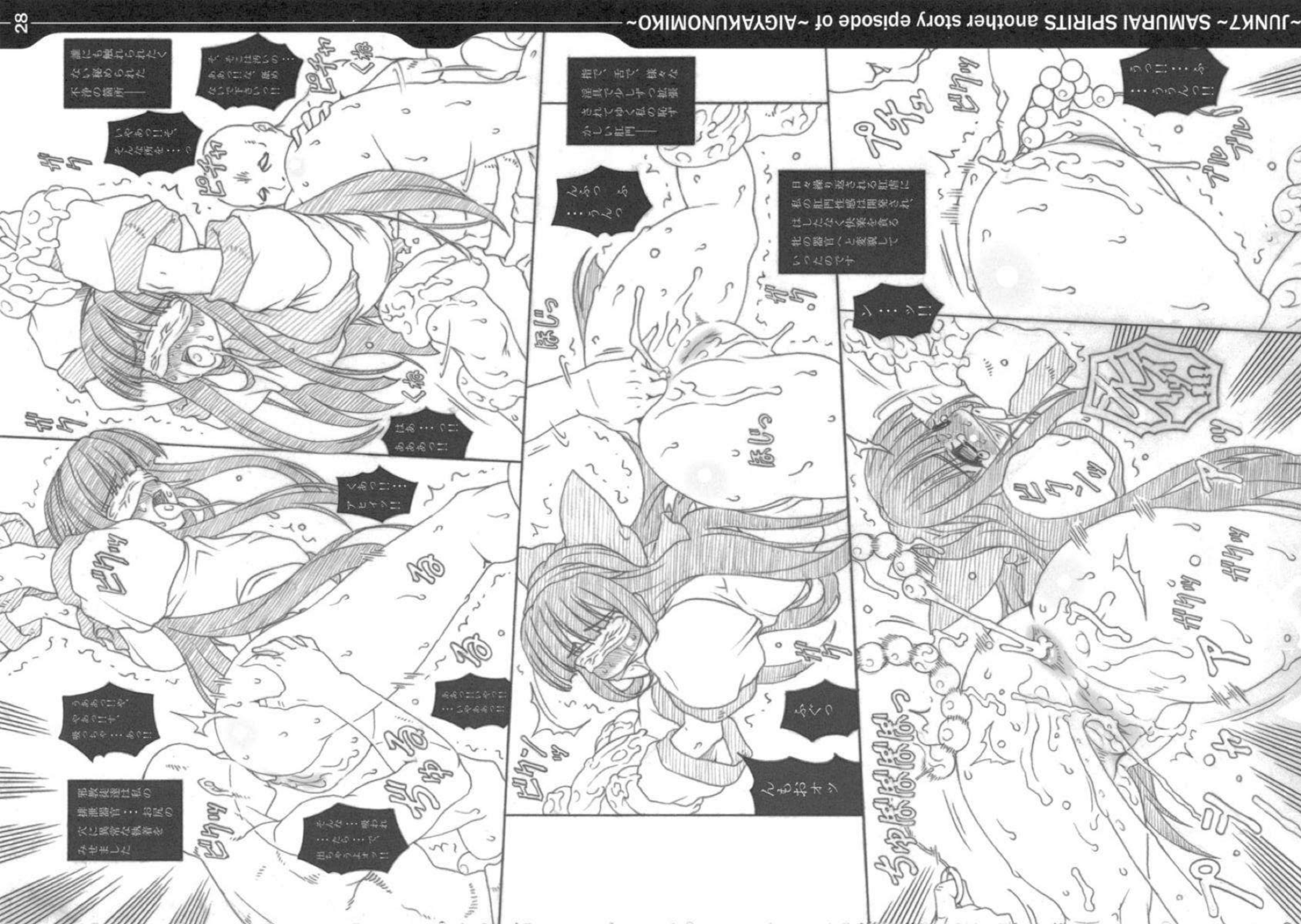

ぴクッ
うあっ!!
ぷっ
ぴクン
ちゅ
ひィんッ!!
ガク
ほ…おオ…ッ
おはああアッ!!
アヒィッ!!いい、
いやぁっ!!
も…もう浣腸は
…許して…あっ!!
…お…おオあッ!!
ガク
ガク
ガク
ガク
あ…お…
おおおっ!!
ああっ!!や、やめ…
んヒィッ!!…い…
入れないでェッ!!
アヒッ!!
ガク

お…ほおっ おォんッ!!
おあっ!!
んおっ!! おっ!!
ブリブリッ
ブリリリッ
ブリッ
ブリュブリュッ
いやあっ!!あっ!! あおおおォッ!!
ガク
ブル ブル
ああ…っ!!あ …い…やぁ…
はー
はー
駄目エッ!!も、 漏れちゃうっ!!
うあっ!!
ビクッ
ブシャ
あ…っ!!
アヒイイッ!!
続
ガクッ
ガクッ
ヴィ
ヴィ
ヴィ
ヴィ
ガクッ
あぁっ!!か、流腸 はもういやっ!!
入れないでっ!! あ…うあァ…ッ
ふふ…まだ宴は 始まったばかりだ、 存分に楽しませて もらうぞ、かすみ
じきにお前も この快楽を自ら 欲するようになる、 妹と同じくな
くくく…


～哀虐乃巫女～
深水直行
…ハンパない
ぁぁぁ
ぁぁぁ
ぁぁぁ


…父…お母…
…助け…ア…
うう…ごめ…ごめ…
鼻が折れる程な痛み、
苦しみ…そしてアミの後
訪れるであろう屈辱の
予感に思はず涙を浮かべました
…お母…み…
…ア…ア…
ご…ごめ…
…お願い…
…ア…ア…
…ア…ア…
…ア…ア

肉牢全体に響き渡る下品な破裂音を恥穴から轟かせながら
女として…決して人に見せてはいけない最も恥ずかしい排泄姿を見世物にされる屈辱
泣きながら全てを搾りきってもそれで辱めが終わる訳ではありません
陵辱者達の責め嬲りは執拗なものでした
この日用意された薬液の量は二十升
限界を超えた恥辱に幾度も失神を繰り返す私を容赦なく責め上げる陵辱者達
もはや出す物の無くなった空っぽのお腹から汚濁の激流を迸らせながら私の意識は暗い闇の底に沈んでいきました
それら全てが無くなるまで三十回以上に渡り、繰り返し浣腸は続けられたのです


ドドド

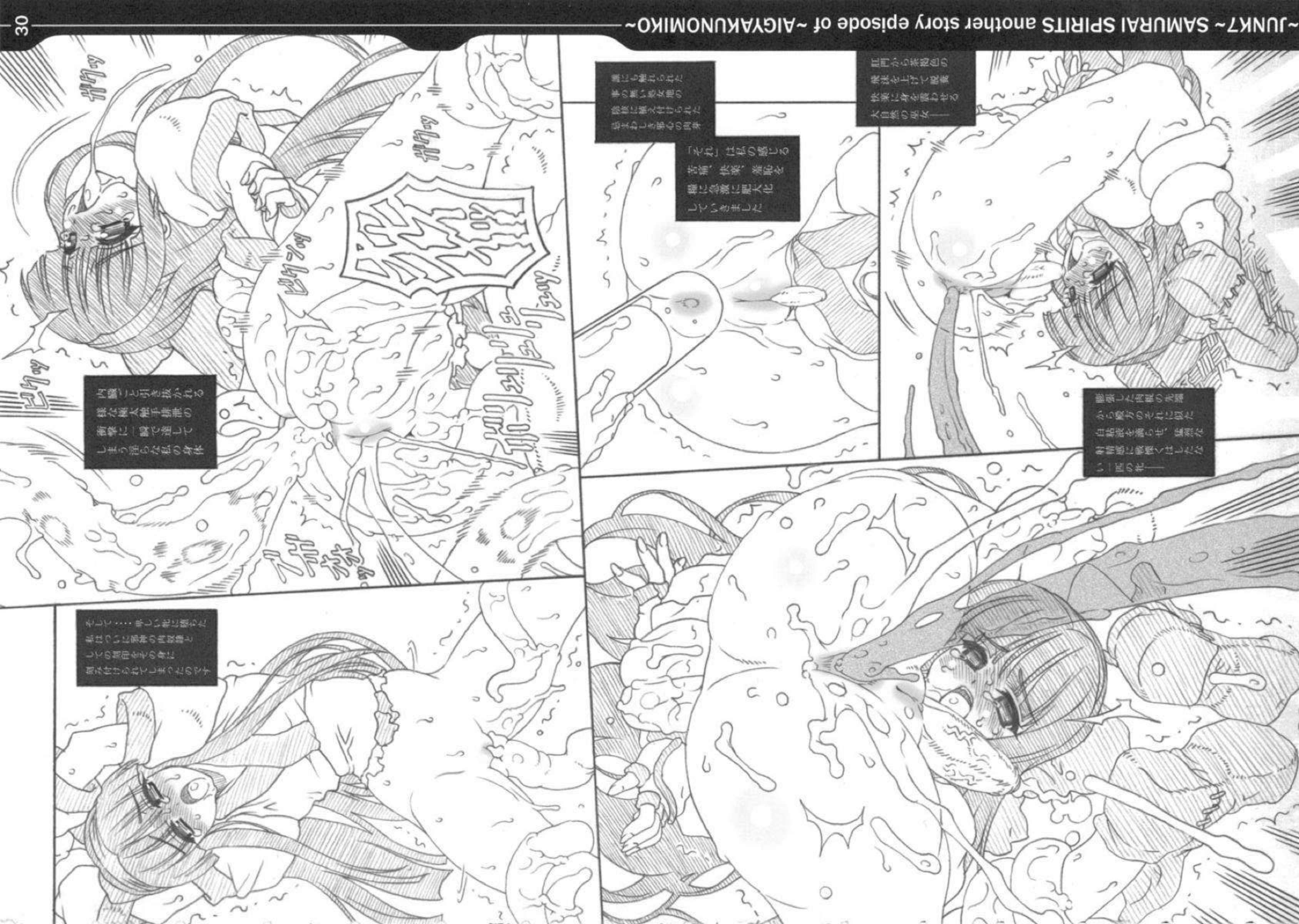
激しい調教によって遂に自身の触手もある淫具を咥え込める程に肛門拡張されてしまった私を

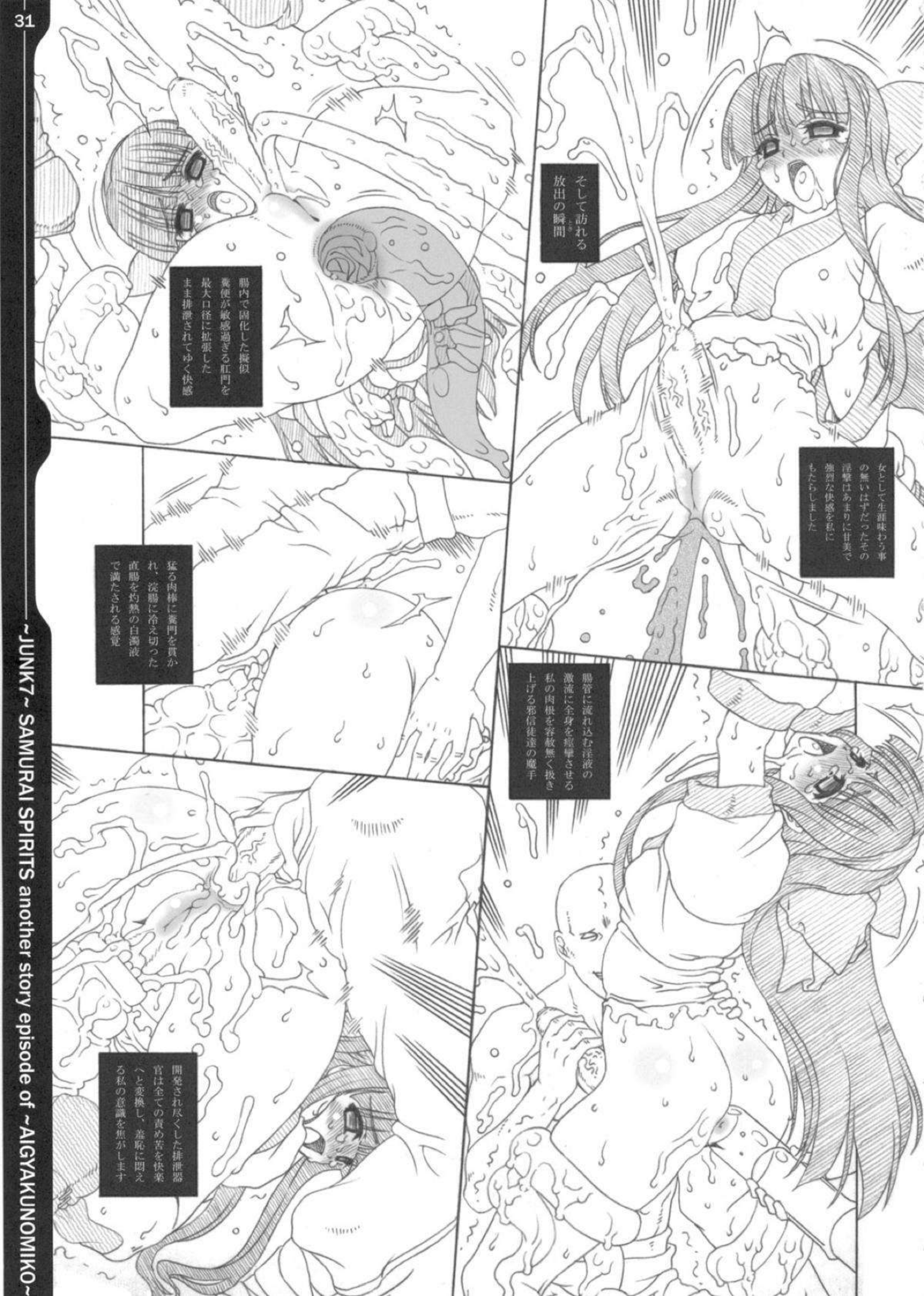
ガチュッ

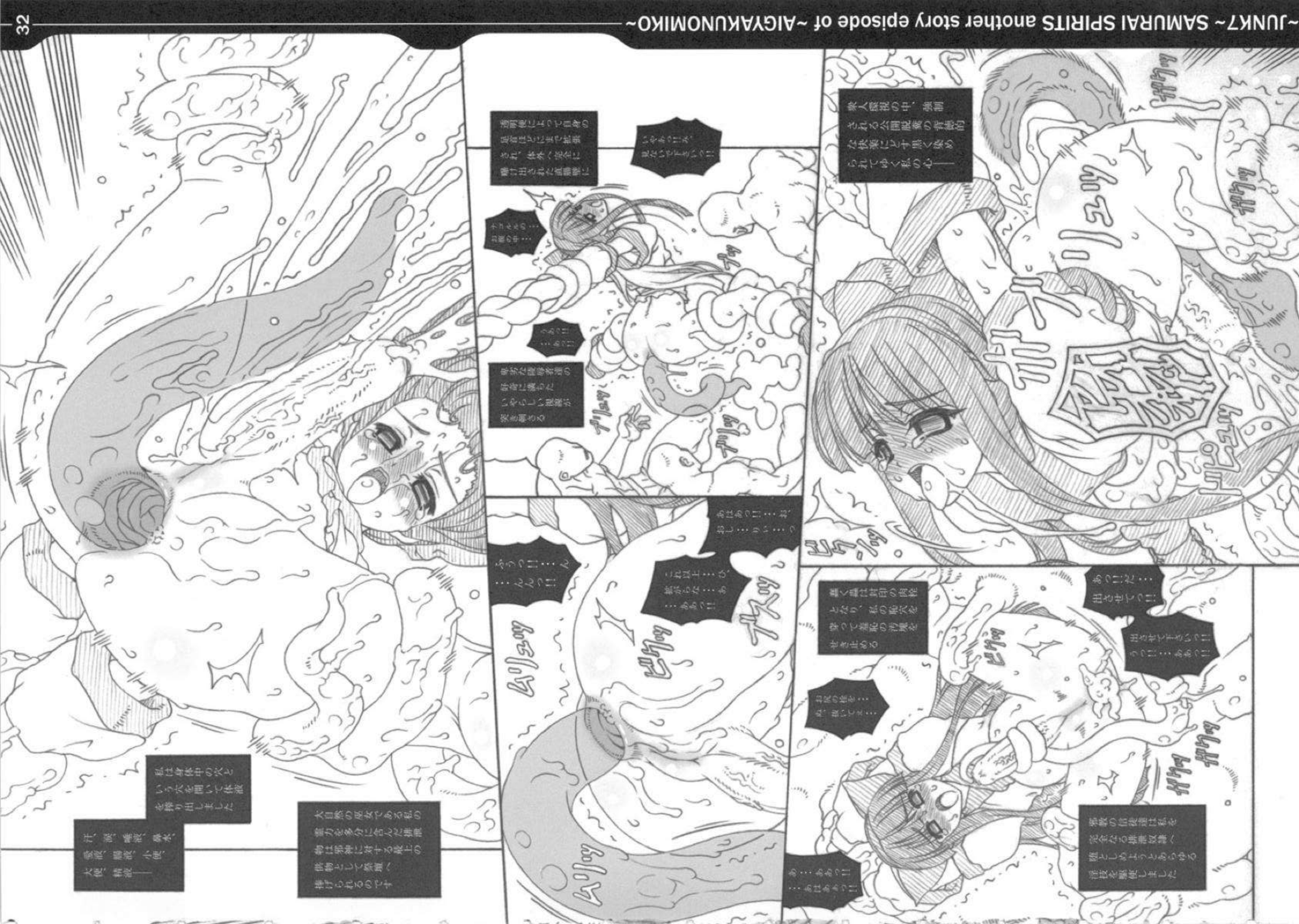
ガリュッ

ガリュッ

ガリ


ガクッ
ガクッ
ガクッ


そして訪れる放出の瞬間
女として生涯味わう事の無いはずだったその淫撃はあまりに甘美で強烈な快感を私にもたらしました
腸内で固化した擬似糞便が敏感過ぎる肛門を最大口径に拡張したまま排泄されてゆく快感
腸管に流れ込む淫液の激流に全身を痙攣させる私の肉根を容赦無く扱き上げる邪信徒達の魔手
猛る肉棒に糞門を貫かれ、浣腸に冷え切った直腸を灼熱の白濁液で満たされる感覚
開発され尽くした排泄器官は全ての責め苦を快楽へと変換し、羞恥に悶える私の意識を焦がします


ドドド

ビクッ
ブピュッ
ウッ
ブリュッ
ブウッ…
プスッ
ガクッ
ムリュ
ムリュ
ウネ
ウネ
ガクッ

大腸の最奥まで自身が練り上げた大量の糞便に埋め尽くされ、腸が張り裂けそうなほどの苦痛は快楽へと変わってゆく

熟成され、濃密な恥臭を放つ極太大便を捻り出しながら私は遂に排便行為で達してしまう変態巫女に堕ちたのです

うあっ!!…あ…かはっ!!…あっ!!

うっ!!…ああっ!!ウ、ウンチ気持ちいいよォッ!!

ビクンッ
ガクッ
ガクッ
ドピュッ
ブピュッ

肛門を封じられ、肉壁に磔とされてから十日もの間用便は許されず、ひたすら淫根から精汁を搾り取られる日々——

ウンチ…させ…て…あ…あぁっ!!

こうして私は底無しの淫獄へと沈んでいきました

人前で行う脱糞行為に堪らない愉悦を感じてしまう変態露出狂——

心は、私の魂はこんなにも羞恥に震え拒み続けているというのに、身体はまるで別人の物のように浅ましく快楽を貪ってしまう

下腹の奥に燻る快楽の火種に操られ、更なる被虐を求めて疼く私の体

父さま、母さま、ごめんなさい…

あっ!!

はあっ!! …んっ!!

ガク

ゴボッ

ゴブッ…

ビクッ

う…あ…あ…っ!!

ナコルルは弱い娘でした

ガク

ピュッ

お、お願いします、もう…

もうお腹が…あっ!!

くね

ぎゅるるるるっ

ぐるるっ

くね

プッ…

ブピュッ

ガク

お、お腹の奥まで…ウンチでいっぱいなんです…うっ!!

はあっ ナ、ナコルルにお慈悲を…下さい…っ!!

もう私…あの頃には戻れません…

お、お願い…ナコルルが太いウンチブリブリするところ…み、見てエグ!!

ブリッ

ビクンッ

う…あ…っ あはァんッ!!

ドリュッ

ビクンッ

ブリュリュリュリュッ

ガクッ

ガクッ

ブリブリッ

哀虐乃巫女・了

狂宴乃巫女

文：hermit_gel
絵：深水直行

草の匂いに濃厚な血臭が混じっている。幾つもの無残な遺体が無造作に散らばり、夥しい血流を地面に吸わせていた。

魂の残滓とその匂いを疾風が舞い上げ、虚空へと運び去っていく。

同胞の死、そして故郷の大地が穢されて行くことにナコルルの胸が傷んだ。そこは古来より微風が肌を撫で、澄んだ湖面が心を写す。そんな静謐の場所だったのだ。

突如来襲した根来の一派を名乗る侵略者集団を改めてナコルルは毅然と見据えた。

綺麗に刈り揃えられた長く艶やかな黒髪を風になびかせ、襲い来る悪衆を刀刃の軌跡で薙ぐ美しき少女。その幼げな面持ちは凛とした中にも柔らかな温かさが漂い、巫女らしい清楚な雰囲気を纏っている。

村の人々、動物たち、そして大自然の寵愛を受けるアイヌの乙女は、邪神アンブロジアの企みと力を背後に感じつつ、仲間の戦士たちと村の最終防衛線を死守していた。

「アイヌの戦士か・・・ちょっと甘く見ちゃったかな？」

敵方の”くの一”が嬉しそうな顔をして言った。彼らもまた村人達の反撃で何人かの味方を失っていたが、その死を嘆く様子は無く、寧ろ薄気味悪い笑みを浮かべてナコルルのことを睨め廻している。

「根来衆が・・・根来の方たちが、こんなところまで来られるはずがありません！」

伝え聞く根来はアイヌと何の利害関係も無い。何故その集団が遙々蝦夷の地に害為さんとするのか。

「ふふ、凛々しいこと・・・あなたが噂の”光の巫女”ナコルルちゃんよねぇ？話に聞いたとおり、とおっても可愛いわぁ・・・」

蠱惑的な瞳を爛々と輝かせ、妖艶なるくの一はうっとりとした表情でナコルルの全身を品定めするように嘗め回す。

女が口にした通り、光の巫女と呼ばれるその少女は同性をも魅了するほどに美しかった。

”カラスの濡れ羽色”に光る腰まで伸びた豊かな美髪、くっきりとした形の良い眉、長い睫に覆われた黒い大きな瞳は二重瞼にやや垂れて、柔和な彼女の性格を際立たせている。

手折れそうに細く括れたウエストから伸びた長くしなやかな脚で大地を踏みしめるその姿は、まるで少女自身が光を発しているかのように周囲の空気を温かく神聖な雰囲気に変化させていた。

類い希なる可憐な容姿の少女を前に、妖女は興奮を隠しきれず淫蕩に声を昂らせる。

「うふふ・・・どれだけ抗ってもあなたに勝ち目はないわよ、素直に降伏した方がいいんじゃなぁい？」

自信に満ちた敵の振舞いにナコルルは嫌な予感を覚えた。妖しく佇む女の背後の空気がゆらめくのに反応し、宝刀チチウシを構え直す。

「遅ーい、もぉ、ヒヤヒヤさせないでよねぇ」

「すまぬ、老人共に手こずっての」

「タ、ターコナンナ！！」

くの一の背後に音も無く現れた敵方の忍者がその腕に抱えていたのは、隣村の少女であった。ナコルルの呼び掛けにも反応せず、ぐったりとしている。

「卑怯な！オペリ（女の子）にまで手を出すのか！！」

ナコルルと共に生き残った最後の同胞が苦々しく叫んだ。恐れていたことが進行しつつある。カムイコタンだけでなく、周囲にまで手が及んでいるというのか・・・。

「貴女たち、いったい何が望みなのです・・・」

「あらーっ、話が早ーい！・・・そうよねぇ、こんな可愛い子がカタワにされちゃったら、一生寝覚めが悪いもんねぇ？」
生き残った最後の同胞、ホロケウポが目で合図を送ってくる。だがナコルルに非情の選択はあり得なかった。
「ナコルル！よせ！」
「いいコね、ナコちゃん。理解したならその剣をこっちに投げて」
「・・・くっ」
宝刀チチウシを鞘に収め、卑劣な侵略者たちに放り投げる。それは同時にカムイコタンの降伏を意味していた。
「ふーん、これがチチウシか・・・不思議な符合もあったもんねぇ。あたしたちの家畜も乳牛（ちちうし）って言うの」
そう言ってチチウシを抜いたくのいちは、その刃先にそろりと赤い舌を這わせた。淫らな、何処か物欲しそうな目でナコルルを見つめている。
「光の巫女ナコルル・・・羅将神ミツキ様の命により、貴女を乳牛に改造するわ」
「やっぱり、貴女たちは・・・アンブロジアの・・・」
「私はミツキ様配下の乳牛調教師、ミツキ・・・あーっ！いま安直だと思ったでしょお？」
ミツキの飄々とした話術に気を取られていたナコルルの背後から、ふいに骨肉を断つ時の鈍い音が響いた。振り返れば首を失ったホロケウポの胴体が、水芸の如く鮮血を中空に噴き上げている。
「ホロ・・・ケウポ・・・」
限界を迎えたナコルルの精神が崩れ落ち、彼女は静かにその身を大地へ横たえた。
「んぁぁっ・・・くぅっ、ふぅん・・・はくぅっ！イヤッ！イヤァァッ！！」
湿り気を帯びた薄闇の中にくねくねと蠢く裸体が浮かび上がる。
ナコルルを乳牛と化するために選ばれた村外れの空屋は、今やその内部を地獄とも呼べる魔界空間へと変容させていた。
知らずに足を踏み入れれば、そこには悪夢のような光景が広がる。床にも壁にも人間の皮膚を張り巡らせたように血脈が通い、生い茂る草木のようにあちこちから無数の腕が生えていた。
いや、腕だけではない。おぞましくも随所より伸びる肉の組織は長い舌であったり、また先端が男根の形状をした肉の棒でもあった。
それら幾本もの肉触手がナコルルを抱え上げ、その素肌を撫で廻しているのである。
裸身に剥かれながらも、彼女の可愛らしさを際立たせる大きな赤いリボン、なめし皮の赤い靴は身に着けたままで、それが全裸よりも寧ろ卑猥な印象を与えていた。手甲さえもそのまま装着されていることから、彼女はここへ着の身着のまま放り込まれたことが想像できる。
「んんっ・・・やぁぁっ・・・んひぃぃぃっ！！らめっ！らめなのぉぉっ！！」
透き通るように白いナコルルの素肌は妖しい粘液に塗れ、鈍い光を放っていた。絶えず天井より垂れ落ちる不気味な液体が身体中をヌラヌラと包み込んでいる。そのせいか全身は火照るように熱く、皮膚感覚が鋭敏になっていた。
船幽霊の怪談を思わせる幾本もの白い腕が、その指先で乳房や尻を愛撫する度、ナコルルの全身はビクビクと快楽に跳ね上がった。
（ダっ！ダメぇ・・・あぁっ、また・・・）
この小屋に監禁されてすでに五日が経つ。妖（あやかし）の触手に乳房を揉まれ、乳吻をこねられ、また陰部を舐め廻されて肛門を穿られ、もう何度イカされたのか分からなかった。
純粋無垢な処女の身でありながら、ナコルルはこの数日間で一生分ともいえる絶頂を肉体に刻み込まれている。それでもその気高い精神は、快楽に身を委ねそうになる己を根気強く戒め続けていた。
「はぁっ・・・はぁっ・・・むぐっ！？」
監禁され、終日性快楽の海を泳がされながらも、日に五度も訪れる食事のせいで体重は寧ろ増加する傾向にある。決められた時刻が訪れると、男性器の形をした触手がナコルルの口腔に潜り込み、得体の知れないペースト食をたんまりと吐き出すのだ。その不気味な風味にたまらず戻せば触手が食道にまで侵入し、直接その流動食を胃袋へ注ぎ込まれることになる。
「うむっ・・・んぐっ・・・ごくっ・・・ごくっ・・・」
甘いようで生臭いその養分汁を今や好きになりかけている自分にナコルルは暗澹たる思いを抱いた。トロロのような粘り汁は腹持ちがよく、せり出した腹がいよいよ重苦しいというのに、食欲はますます増進している。
（も、もう飲んじゃダメ・・・お腹・・・苦しいのに・・・）
拘束されてからの五日間、食事をしては身体を弄ばれることの繰り返しで、無論一度も用便に行くことは叶わなかった。
故に小便などは垂れ流しである。微細な触手に尿道を虐められながら失禁してしまったこともあるし、どうしても我慢できず、顔を赤らめながらたっぷりと床に放尿してしまったこともある。
床には何故か沼の水面を思わせるような黒く大きな鏡が置かれていて、ナコルルは自分の恥ずかしい姿を嫌でもその目に焼き付けなければならなかった。
一方で大便は堰き止められたように出てくる気配が無い。せり出した腹部は重く、腸が張っているのに排便には至らなかった。
恥を忍んで懸命に息んだこともあったが、すかさず触手に肛門を嬲られ中断を余儀なくされた。
（きっと、あの丸薬のせいなのですね・・・）
ここに監禁される前に飲まされた、白玉のような物体。それが邪悪な蟲術の卵であり、いま正に体内で孵化した幼蟲が彼女の便通を制御しているとはナコルルも気付いていない。
再び無数の妖指がわらわらと肌を這いずり出し、ナコルルが可愛らしい嬌声を上げ始めると、実に数日ぶりに小屋の扉が開け放たれた。
「ナ～コちゃん、具合見にきたわよぉ？どう？もうすっかり肉触手の虜になっちゃったんじゃなぁい？」
「はぁっ・・・んぅぅっ！・・・だ、出して・・・ここから出してさい！」
敏感な肉豆を丹念に嬲られ達しかけていたナコルルだったが、何とか正気を振り絞って女調教師に懇願した。
「あらあらぁ、まだ堕ちてなかったのぉ？　その方が楽になれるのにぃ」
「は、決して・・・貴方たちのいいようにはさせません・・・私は邪神になど屈しない！」
「ふぅん、そう。でもここをこんなにしちゃってるんだから説得力ないなぁ」
ねっとりと巻き付く触手に卑猥なM字開脚の姿勢を強要され、ナコルルの秘貝がミツキの目に晒される。
股間の縦スジに過ぎなかった秘裂も、この数日ですっかり淫らな陰唇をはみ出させ、敏感な肉豆をつんと尖らせていた。
丸出しの秘部をミツキの視線から隠そうと必死に身をよじらせるナコルルを、幾本もの無慈悲な指が肛門すら剥き出しになる開脚姿勢に固定し直してしまう。
「やぁぁっ！見ないで！お願いです！見ないで下さいっ！！」
「あぁん、もう可愛過ぎぃ。ナコちゃんのオマンコ、赤ちゃんみたいにツルツルなんだもん」
人差し指を伸ばし、ナコルルの未発達な肉ビラに沿ってそろそろと指先を這わせるミツキ。それに合わせてナコルルの身体は感電でもさせられているかのようにビクンビクンと跳ね上がった。
「やっ！やめ！あっ！ひぁっ！はひぃっ！！」

天井から伝う粘液を指で掬い、ナコルルの叫びを無視して、性器のみならず後ろの孔にもたっぷりと塗り込んで行く。
「これはねぇ、乳牛の肉をやわらかぁくする出汁（だしじる）なの。例えばどんな効果があるかって言うとぉ…」
ミツキのセリフに合わせ、左右の壁から二本の手がするりとナコルルの尻に伸びて行く。二組の人差し指と中指が、固く窄まっていた処女の肛門に容赦なく潜り込み始めた。
「ひっ!?ひぁぁあっ!!」
四本の指がナコルルの羞恥の穴を上下左右に引き伸ばして行く。締めようとしても括約筋にはまるで力が入らなかった。
たちまちぽっかりと黒い正方形の穴がナコルルの股間に口を開け、綺麗な鮮紅色の腸壁までもが外気に晒されてしまう。
「ね、こんなふうにお肉がとってもやわらかくなるの。だからお腹の中にもたくさん物が詰め込めるってわけ」
「いやあっ!うぐっ!も。戻して下さい…お尻が裂けちゃう…うっ!くぅぅっ!」
ミツキはナコルルの尻に顔を寄せ、くんくんと匂いを嗅いだ。
「やっ!?やめて下さい!そ、そんな不浄の門を…」
「いい匂いがするわぁ…順調に体内熟成が進んでる」
頬を染めたナコルルをさらに辱めるようなセリフと、その意図が掴めずにナコルルは沈黙する。
「ちょっと検査するからねぇ」
ミツキの背後より毛深く太い腕がにゅっと伸び、指先を束ねるや一気に犠牲者の直腸へ侵入を開始した。十分にほぐれた括約筋は柔軟に広がって、たちまち手首までを直腸内に飲み込んでしまう。
「うっぐぅぅっ!!くる、しい!ぬ、抜いてください…んぅぅっ!!」
「いきなり腕まで入っちゃうなんて…とんでもなく食いしん坊なお尻の穴ね」
「あっ!?あぁぁぁぁっ!!」
腸の中の指が折り曲げられる感触があった。拳を握った状態の腕が引き抜かれていくと、ぴちぴちに拡がったナコルルの肛門粘膜が裏返り、排泄時に覚える背徳的な快感が普段の何倍にもなって背筋を伝わってくる。
「んひぃいっ!!」
ぐぽっと湿った音を立てて握り拳がひり出された。ナコルルの腸液に濡れて湯気を放つ腕が、ゆっくりとその手を開いて行く。手の平には薄茶色の便塊と、その上で蛆を何倍にも太らせたような蟲が不気味に身体をくねらせ、のたうっていた。
（あ、あんなものが…私のお腹の中に…?）
「下ごしらえは終わったみたいね…そろそろお腹の中を綺麗にしましょうか」
「なにを…なにをするつもりなんですか…?」
「最初の蟲がナコちゃんの体内で下地を整えてくれたから、そろそろ次の蟲と交代ってわけ」
ミツキは嬉しそうに人体実験の経過を告げながら小さな竹筒の容器を取り出し、目の前にぽっかり口を開けた不浄の穴に先端をあてがった。節を抜いた内部はピストン構造になっており、浣腸器と同じ原理でナコルルの腸内へ薬液を注入することができる。
「そ、それは?…ひっ!?あっ!うあっ!は、入ってくるぅ…ううっ!っ、冷たいっ!ひぁっ!や、止めてえっ!!」
ひんやりとした液体が腸内に染み渡る感覚は不思議と不快に感じなかった。生暖かい室内で生ぬるいものばかり飲まされていただけに、冷えた浣腸液を寧ろ口から摂取したいという奇妙な渇望さえナコルルの中に湧き起こってくる。
浣腸というおぞましい行為にナコルルの身体が悦びを感じてしまっていた。
「ほぉら入った。すぐに蟲が反応して、お腹の

ものがみーんな出てくるからねぇ」
「えっ？あっ・・・あの・・・」
ぐりゅりゅりゅりゅうっ・・・
「うっ・・・」
ごぼり、と腸管の中身が移動を始め、数日ぶりの便意が喚起される。たった今注腸された薬を吸って、腸内で繁殖した蟲がその任を解き、堰き止められていた内容物が一斉に出口へ押し出されていくのが分かった。
ただ便秘が蟲のせいだったと理解はできたが、淫猥な格好をさせられたまま身動きも取れず、どうして用が足せるのか。
「ミ、ミツキ、さんっ！・・・こっ、この手と・・・足を・・・解いて・・・くだ、さい・・・はくうっ！」
「うふふ、効き目抜群でしょ？ビックリする程たくさん出るから期待してね」
想像を絶する恥辱の予感に、全身を締め付ける肉の呪縛を解かんとナコルルは必死でもがいた。
「かっ、厠へ！・・・うぐうっ！・・・厠へ行かせて下さいっ！！」
「いいからいいから、そのまま思い切りしちゃいなさい」
「こっ、こんなところで、できませんっ！」
「どうしてぇ？ナコちゃん、たまに息んでウンチ出そうとしてたじゃなぁい？」
「っ！・・・そんなこと、してません！」
「ウソ！貴女の様子は時々この鏡に映して、村の人たちにも見せてあげてたんだから」
「う、嘘です・・・そんなの嘘です！！」
「ナコちゃんがこの鏡めがけてオシッコした時なんでぇ、もうみんな大興奮だったわよぉ」
「ぁ・・・あぁぁ・・・いやぁぁぁあああ！！」
余りの恥辱にナコルルは一瞬気を失いかける。体中の穴という穴を犯されて幾度も絶頂を迎えたこと、床に小水を垂れ流し、あまつさえ排便のために思い切り気張っていたこと・・・。
己の痴態は全て床に据え付けられた鏡を通し、村人の目に晒されていたのだ。

（み、見られてた・・・全部見られてたの・・・？）
喩えそれが嘘だとしても、この惨劇の末路をミツキ一人にだって見られるわけには行かない。ぎゅるぎゅると唸る腸が老廃物を次々と直腸へ送り込む動きにナコルルは愁眉を寄せて抵抗した。
「くっ・・・はぁっ！・・・はぁっ、はぁっ・・・お、慈悲を！・・・どうか、か、厠に・・・くぅぅっ！」
「そっか、その格好じゃ出しにくいよね」
ミツキの合図に再び無数の触手が蠢き出し、力強く捕縛した獲物の姿勢を変化させ始める。
「なっ・・・なっ、なにを！　やめて！　やめてください！！」
必死の叫びも虚しく、村人の目ともいえる鏡を和式便器を使うかのように跨がされてしまうナコルル。ミツキの言葉が真実ならば、尻の穴から羞恥の塊がひねり出される様子を、真下から何もかも見られてしまうことになる。
「ああっ！いやっ！こんなのいやあっ！！お願いっ！それだけは赦してぇっ！！」
鏡にはナコルルの秘部が余すところ無く映し出されていた。限界を迎えつつある直腸の働きで肛門周辺が盛り上がり、それを押し留めようと懸命に括約筋が締め付けられる。きゅうきゅうと収縮する美肛は少しずつ花開くように広がりを見せ、かつてない強烈な便意に屈服しようとしていた。
「お願いです！せめて、せめて鏡をどけて下さいっ！！・・・あぁっ、もう！　もう！」
ぴゅっ！・・・ぷすっ、ぷしゅぅっ・・・
美少女排泄ショーの開始を告げるかのように、蟲の吸い残した薬液と可愛らしい音のオナラが漏れ出す。ミツキは砂かぶりの特等席にしゃがみ込み、ナコルルのむっちりした桃尻を見上げながら、うっとりとその匂いに鼻をひくつかせた。
「ごめんねー、もうナコちゃんに選択肢はないの・・・ほら、もう頭が出てきてる」
ぷちっ、ぷちっと湿った音をさせて、鮮やか

な茶褐色の便塊が固そうな先端部を覗かせ始める。ナコルルの願いも虚しく引き伸ばされていく菊皺を、とどめとばかりにミツキの人差し指がそろりとなぞった。

「ひぁっ!?…あ…あぁ…もう…ダ…メ…」

括約筋が麻痺したように言うことをきかなくなった。同時にナコルルの肛門が恥ずかしい程に大きく広がり、直腸粘膜を裏返しながら拳大もある極太便をひねり出し始める。

「かっ!はっ!…んぁあああっ!…んひいいいっ!!」

固く身の詰まった便塊がじわじわとアヌスを通過していく快感に、ナコルルは恥じらうことも忘れて陶酔した。数日ぶりの排便ということに加え、ミツキの仕込んだ蟲によりナコルルの肛門感度は普段の数倍に高められている。

「うわ、ふっとおい…貴女みたいな可愛いコちゃんが、こおんなウンチをひり出すなんてねぇ。村の人達もきっと大喜びして見てるわよぉ?」

「あぁ…いやぁ…見ないで、ください…くふっ…んはぁっ!」

鏡の中に、床まで届きそうな長い大便をぶら下げた自分が映っている。つい先ほどまでは泣き叫ぶ程の恥じらいを覚えていたのに、排泄快楽のスイッチが入った途端、ナコルルの中に露出狂の気が芽生えていた。これも蟲の及ぼす恐ろしい影響のひとつである。

(ああ…恥ずかしい、恥ずかしいよぉ…もう死んでしまいたい…それなのにどうして…どうしてこんなに気持ちいいの…)

ぬちりと音を立てて長々とぶら下がっていた一本糞が千切れた。その成果に満足するように、ナコルルのアヌスが可愛らしく収縮する。鏡の脇に横たわった大便から立ち昇る白い湯気を、ナコルルとミツキはうっとりと味わった。

「貴方が飲み続けてきた精汁はウンチの量を何倍にも増やしてくれるの…まだでしょ?まだまだいっぱい出るわよね?」

「は…い…ま、まだ出ま…す…んっ…んうう〜〜っ!」

排泄時に分泌される脳内麻薬で羞恥心を麻痺させられたナコルルは、ミツキの命令を素直に受け入れて、いじらしく息み始める。清楚な窄まりに戻っていた菊蕾は再び妖艶に花開き、今度は柔らかめの黄金塊をひねり出し始めた。にゅるにゅると溢れ出す軟便はそれでも形を崩さず、床にまで達してたちまちトグロの山を築き上げていく。

よく見れば便の中には肥えて丸くなった蟲たちが無数にその身をのたくらせていた。

「はぁっ…んっ!…ふぅっ…ひっ、ぁぁあああっ!!」

眉間に切なげな皺を寄せて糞便を生み出しながら、ナコルルの身体がビクビクと大きく痙攣する。震える尻間から大便が千切れ飛び、部屋のあちこちに飛び散って芳しい湯気を放った。

光の巫女という神々しい存在を排泄行為だけでイってしまう雌奴隷へと貶めた成果にミツキは一人ほくそえむ。

「すっかり出し切ったら次の蟲を仕込まなきゃね…ふふ、まだまだ調教は続くわよ」

気を失いぐったりと頭(こうべ)を垂れるナコルルのアヌスから茶色く濁った腸液と共に最後の幼蟲が産み落とされ、暖かな母の胎内を惜しむかのように床上でその身をくねらせた。

「はぁっ、はぁっ…」

重く垂れ下がった乳房がじんじんと痛みを訴えていた。

俯せのまま後ろ手の開脚姿勢で宙吊りにされたナコルルの胸部から、たわわに実った柔らかな双果がぶら下がり、ゆさゆさと揺れている。

ナコルルの体内に仕込まれた二世代目の蟲は、一世代目の整えた環境ですくすくと育ち、宿主への恩返しとばかりに魔界のホルモンをさかんに分泌し続けた。

その効果は、乳房の異常発達という形で現れ、僅かな隆起を見せるのみだったナコルルの幼い胸は、たちまち雌牛のような逞しい膨らみへと成長している。

(くっ、苦しい…また…また、搾ってもらわないと…)

脂肪組織を包む白い皮膚はぴちぴちに張り詰めて、その下に青い静脈を浮かび上がらせている。

「あ…あくっ! あぁぁん!」

ずっしりと重い乳房がぶらぶらと揺れる度に、ナコルルの口から甘い悲鳴が漏れた。

邪悪なるホルモンの作用は母乳の分泌すら促し、妊婦でもないのに搾乳を怠れば乳房が痛む。下を向いた綺麗な薄桃色の乳輪の先で親指大にまで勃起したはしたない乳首が射出の瞬間を夢見てひくひくと震えていた。

「あの…ミ、ミツキさん…」

「なぁに?ナコちゃん」

「苦しいんです…そ、その…胸、を…」

そこまで言いかけてナコルルは唇を噛んだ。乳を搾らねば苦痛は増して行く。自ら手を下すことは許されぬから、その度に恥を凌ぎ搾乳の世話を懇願しなければならない。

「くふふっ、パンパンだもんねぇ…搾って欲しいでしょ?」

「は、はい…ひっ!? ひぁぁぁぁっ!!」

固く尖ったニップルを摘んで引き伸ばされ、ナコルルは仰け反った。陰核に負けず鋭敏な器官と化した乳頭部は十数秒こねられるだけでアクメに達することができる。ましてやその組織を貫く腺よりミルクを迸(ほとばし)らせれば、生物本来の排泄快楽も喚起して、痴呆状態に陥る程の絶頂感に悶絶を余儀なくされる。

「ほうら、こうすると気持ちいい? おっぱいの先っちょ、ナコちゃん大好きだもんねぇ?」

くりくりっ、くにゅくにゅっ、くりいいっ!

「ひやぁっ!や、やめへぇっ!!ち、ちくび!ちくびはらめェェェっ!!」

乳頭愛撫の心地良さに双球の疼痛はしばし相殺されるが、波が返すように苦痛は増幅してまた押し寄せる。胸の膨らみはいよいよ熱を帯び、増産されたミルクの容量に乳輪部すら盛り上がり始めていた。

「くぁっ!お、お願いです!おっぱいが痛いんです!どうか、おっぱいを搾って下さいっ!!」

「ふふふっ、どうしよっかなぁ? だいぶんお乳が出るようになったしい、そろそろ村のみんなにもご馳走してあげようか?」

「…ど、どういう事ですか?」

「ナコちゃんのおっぱいをねぇ、みんなに搾って貰うの。どう? 素敵でしょ」

「そ、そんな!非道な!…や…やめ…やめて下さい!!」

わなわなと震えつつも、これだけの責め苦に屈せず凛とした瞳で睨みを返すナコルルに、ミツキの嗜虐心はいよいよかき立てられる。

「いいじゃない、乳牛として立派に成長しているところをみんなに見て貰いましょ?」

「いやっ!いやぁぁぁあっ!!」

首輪から伸びた鎖をぐいぐいと引かれ、踏ん張る力も虚しく森の奥へと引き摺られて行く黒髪の巫女姫。

目隠しをされたナコルルは麻縄で後ろ手に緊縛され、絞り出された砲弾のような美巨乳を陽光に照らされながら歩を進めた。

小振りの西瓜程にも膨れ上がった双乳をゆさゆさと揺らしながら、赤いリボンに赤い靴、両手には手甲のみという捉えられた時の衣装そのままで、強制招集された村人達の前に恥ずかしい姿を晒すナコルル。

(おお、ナコルル…なんという事だ…)

村にはもう老人、子供、女性といった戦闘能力を持たぬ者しか残っていない。子供は好奇と畏怖の目で、老人は哀れみの想いで、赤いリボンをつけた愛らしい少女剣士の変わり果てた姿を遠巻きに見つめていた。

衆人環視の中緊縛を解かれたナコルルは、大勢の人間の気配に肥大した双乳をせめてもの思いで両手に包み隠す。
（見られてる…みんながこのみっともない私の姿を見ている…）
勃起した乳首の弾力を手の平に感じる度、いっそ自分で自分の乳を搾ってしまいたくなる衝動と闘う。みんなの見ている前で、いやらしいよがり声を上げながら射乳する光景を思い描いただけで、ナコルルの女の部分がはしたなく濡れた。

そこは森の中でも木々が伐採され、切り株を卓や椅子代わりにして集会などが催される広場になっていた。本来なら様々な祭祀や審議を執り行なう場所で、乳牛ナコルルの成長ぶりが披露されようとしている。
「さて、普段からロクなものを食べていないお前たちに極上の牛乳を馳走しよう」
ざわっと場に緊張が走る。村の大人達全てにとって愛娘にも等しいナコルルが、乳牛に改造されているという噂は既に伝わっていた。だが風の噂に聞くのと現実を目の当たりにするのではやはりインパクトが違う。
（姉様…）
事情を解さぬ童の中で、著しい反応を見せるのはナコルルの愛妹リムルルである。両手を組合せ、祈るようにして愛しい姉の運命を案じている。
「そこの小娘。ここに来るのよ」
それをあざとく見出したミツキだったが、よもやその痩せ細った少女がナコルルの実妹だとは気付いていない。
「さっさと来て、このメス牛の乳を搾ってやりなさい」
ナコルルの身体がびくんとすくんだ。本当にやるつもりなのだ。まるで家畜の乳を搾らせるように、こともあろうか村の子供に自分の母乳搾らせるつもりなのだ。
「ミ、ミツキさん、やめて下さい！自分で…自分でしますから…だから村の子供達には！！」
「だーめ、自分で搾るのは禁止。分ってると思うけど…勝手なことしたら子供たちを…」
「分かりました！！従います！！」
「始めからそうすればいいのよ。ほら、お乳しぼりのお願いはどうするんだっけ？」
ナコルルは顔を真っ赤に染め、頭の後ろで両手を組んで跪くと豊かな胸を突き出すようにして背を反らした。たわわに実りながらも垂れることの無い巨大な果実が大きく張り出して、その頂点で愛撫をねだるように二本の乳首が勃起している。
姉を斯様な姿に変えた悪魔の所業に怯えながら、それでもおずおずと一歩ずつを進んで行くリムルル。姉の名を呼びたい衝動を必死で堪え、その苦しみを何とか軽減できないかと思案を巡らせていた。
「さ、ナコちゃん、ご挨拶なさい」
「もう…もう、許して下さい…これ以上の辱めは…」
「ナコルル」
「う…はぁっ…お、おっぱいが…はち切れそうなんです…お願いします、たっぷりとナコルルのお乳を搾って下さい」
よもや目の前に立つのが自分の妹とはつゆ知らず、ナコルルはガタガタと震えながら羞恥の挨拶を口にした。光の巫女としての気高い精神が搾乳快楽の期待に打ち負けそうになる。
「この中にね、たーんと搾ってちょうだい」
姉妹の間に置かれたのは赤子が湯浴みできるほどの大きな盥（たらい）である。ミツキに背中を押されて前屈みになり、ナコルルの卑猥な巨乳が盥の中へこぼれ落ちんばかりに垂れ下がった。
「頼んだわよ、お嬢ちゃん。お乳の搾り方は心得てるわね？」
「し、搾るって…」
「簡単よ、その小さなお手々で乳首を握って、引っ張るようにしごけばいいの」
「姉…こ、このお姉ちゃんの、おっぱいを…？」
「そうよぉ、ホラ、おっぱいがぱんぱんに張ってるでしょう？搾ってあげないとぉ、このコ、苦しくて仕方ないのよ」
（姉様、可哀想に…いま楽にしてあげるからね…）
変わり果てたその姿に恐れるより強く姉を想う気持ちがリムルルを動かす。
（リムルル！？リムルルなの！？）
突如耳を打った愛妹の声に動揺するナコルルの豊乳を、幼い小さな手がむんずと掴んだ。
ぐにゅうぅっ…ぷびゅぅ――っ！！
「ふぁぁっ！？ひっ！！んひぃ――――っ！！」
牛のように大きな乳首を握り締めてぎゅうとしごけば、発達したナコルルの乳腺から射精の如く母乳が迸る。
溜まりに溜まった乳汁をようやく搾り出された快感に、ナコルルは全身をガクガクと痙攣させ軽いアクメを迎えた。
「うわ…ほ、ホントにおっぱいが出た…」
「んひぃっ！！あひっ！！や、やめ…やめ、て…ダメ…ダメ、よ…」
「どんどん搾ってあげてねぇ、そうすればこのコ、もっと楽になるんだから」
ぎゅぅっ、ぎゅぅ！ぼびゅっ！ぼびゅびゅびゅぅ――――っ！！
牛を扱う要領で搾れば面白いほど大量に乳が噴き出してくる。言葉巧みなミツキの言うがまま、リムルルは姉の乳を搾り続けた。
「はひぃぃっ！…ひぅっ！…ひぃぃっ！や、やめへぇっ！お…おっぱいれぇ…おっぱいれイっちゃうぅぅっ！！」
姉の嬌態に驚きつつも、吸い付くような乳肉の手触りに夢中なリムルルの様子をミツキは見て取った。その肉に触るだけで癒され、淫猥な気持ちすら引き起こされるのが良い乳牛の条件である。
「あ、あれ…？」
盥がナコルルのミルクでなみなみと満たされる頃、ふいに母乳の出が悪くなった。きつめに搾っても滲む程度にしか乳が出ない。もう搾り尽くしたかと思いつつも、未だ息の荒い姉のぷりぷりした勃起乳首からリムルルは手を離すことができずにいた。
「はぁっ、はぁっ…」
（姉様…まだ苦しそうだけど…）
「乳腺が詰まったみたいね、ちょっとどいていなさい」
「え…？」
そう言ってミツキはナコルルの背中から覆い被さるように手を伸ばし、はち切れんばかりの豊乳を根元から掴み上げた。
乳頭部が驚くほど膨張し、リムルルの手が自然と離れる。
「はぁっ！？くっ！くひぃぃぃぃっ！！」
乳首の奥で窄まっていた排乳孔がいやらしく広がり、中に詰まった練乳の塊を押し出し始めた。ぐぅっと柔乳の中身を搾り出すと、濃厚な黄色味がかった"乳塊"がにゅるんとひねり出され、乳首の先にぶらりと垂れ下がる。
「は、はひぃぃぃ――――っ！！」
まるで乳首から軟便を排泄したような感覚にナコルルの快楽中枢がショートする。乳牛の中でも選ばれた者のみにしか造り出せない滋養たっぷりの乳塊がぼちゃんと盥の中へ落ちると、ぽっかりと空いたナコルルの乳腺からドロドロと母乳が溢れ出した。
（あ、あれが、乳牛になるということか…）
実の娘のように育ててきた純真無垢で心優しい少女が人外のものに造り替えられていく惨劇を村人達は呆然と眺め、嘆き、また戦（おのの）いていた。
盥が白濁液でなみなみと満たされるに連れ、ミツキの顔には喜悦の笑みが浮かび始める。
「うふふっ…さすがは世界にただ一人の神聖

なる存在、麗しき大自然の巫女。見込んだ通りねぇ、こぉんなにいっぱいお乳が出せるなんて…それに乳塊まで」

食欲と性欲を刺激する甘酸っぱい芳香が周囲に漂い始めていた。いま起こったことに現実感が伴わぬまま佇むリムルルの口内にもこんこんと唾液が湧き出してくる。ここのところロクな食べ物を口にしておらず、ただでさえ幼く欲望に素直なリムルルの目に、大好きな姉のお乳は最上のご馳走と映った。無論、汚いなどという感覚は微塵も抱いていない。

「味見、したい？」

ミツキの問い掛けに、ぼうっと盥を見据えていた幼妹がコクリと頷いた。いまや本能のまま振舞い始めた妹の姿はナコルルに見えず、たださらさらと揺れる木々のざわめきと二人の会話が耳に届くばかりだ。

「ダメ…ダメよ…そんなものを飲んだら…」

ミツキが黙って頷くのを見て、リムルルの中でタガが外れた。口の広い盥に頭を突っ込んで、びちゃびちゃと犬のように舌を動かし、やがて堪え切れなくなったのか、ずぅっと下品な音を立てて一気に吸い込み始める。

「やめなさい！ 飲んではダメよ!!」

「んぐっ、んぐっ、うぐっ…はぁっ…美味しい…姉様の味だよ…美味しい、姉様ぁ…」

「姉様？」

ハッとナコルルが息を飲み、全てを察したミツキが邪悪な薄笑いに唇を歪めた。

「成る程、光の巫女には氷の精霊を使役する妹がいると聞いていたが…」

「やっ、やめてください！お願いです！その子には手を出さないで！」

ゴクゴクと咽を鳴らして夢中で姉の乳を飲み続けるリムルルの傍らに腰を下ろし、キュロットのような下履きの腰回りに沿ってミツキの指先がつうと動く。鋭利に研がれた爪先の秘技は粗末な布地を易々と切り裂いて、青白い少女の尻をはらりと露出させた。

「ふぁ…？」

口の周りをねっとりした白濁液で汚したまま、トロンとした目でリムルルが背後を振り返る。腰から下を覆うのが純白の褌のみであることに気付き、やおら頬を赤らめてもじもじと肢体をくねらせた。乳牛の母乳に含まれる麻薬的な成分が劇的に効果を発し、まだ幼い童女を妖艶な痴女へと変態させつつある。

「ねぇ、そのお乳、お姉さんにも飲ませてあげない？」

「ね、姉様にも？…うん、そうだね…こんなに美味しいんだもの…姉様にも…飲ませてあげなきゃ」

「リムルル!?どうしたの？しっかりして!!」

「あーもー、ナコちゃんはちょっと黙ってて」

ミツキが手をかざすや禍々しく空気が淀み、何処からか実体化したミミズのような触手がナコルルの首に巻き付いた。驚愕に口を開いた所へ束になったミミズが一気に潜り込む。

「んご」おっ!?う、んむぅっ!うもぉーっ!!」

生暖かい粘液塗れの軟体生物を咽の奥まで押し込まれ、こみ上げる吐き気を堪えながらナコルルは必死で鼻から酸素を取り込んだ。だがその外気もさんざ放った乳汁の甘い匂い、日々濃くなる己の体臭、口腔一杯に満たされた触手の妖しい臭気に汚染され、嗅覚を通じてその場に居る者を少しずつ狂気へ導いている。

「イダボンサ…ミヤクサン…ラタクノアクト…」

視覚を封じられた上、喋ることすらままならなくなったナコルルを余所に、ミツキは下半身を露わにしたリムルルの性器を弄びながら異国語のような呪詛を唱え始めた。

もはや魂まで堕したか、宿敵の女調教師にしがみつき、トロトロと恍惚の涎を垂らしていた

リムルルの身体がふいに魚の如く痙攣を起こし始める。
「ひっ!?ひくっ!あっ!あそこが!あそこがヘンなのぉ!」
「そうよお、貴女の精霊さんを分解して肉組織と融合させたモノをね、ここから生やしてあげてるの」
「え?…コンル…死んじゃったの?…」
「違うわ、生まれ変わったのよ…ほら、貴女のオチンチンとして!」
「うわぁ…」
股間を見つめ、目を輝かせるリムルル。如何なる邪悪な魔術の力か、そこには芋虫を連想させる肉太の男性器が青筋を立て、褌の隙間からはみ出して臍の辺りまでそり返っていた。
「こ、これ、なんだか…じんじんしてる…硬くって、びくんびくんって…」
「じっとしてて。お乳を吸い上げる管もつけてあげるわ」
透明なゴムチューブ状のミミズがリムルルの腿を這い上がり、その先端を肉筒の根元に潜り込ませた。尻尾の側は盥に浸され、すぐにそのぷりぷりとした細い胴体の中を黄白色のミルクが駆け上がって行く。
「あ、あ、なんか…なんか出ちゃうぅっ!あぁぁっ!あふぅ――っ!!」
吸い上げられたミルクを尿道に注入され、たまらずリムルルはびゅうっと勢い良く疑似射精した。女として一生味わうはずの無かった精通絶頂に脳髄を焼かれ、急激に性熟し始めたリムルルはさらなる快楽を求めて甘えるような視線をミツキに向ける。
「きもちいい…きもちいいのぉ…いまの、もっとしてぇぇ…」
「いいわよお、じゃあそのオチンチンをね、お姉さんのお尻に入れてあげなさい」
「姉様の…お尻に…?」
「むぐーっ! うむ――っ!!」
何が起きているのかまるで理解できぬまま、ナコルルは無数の触手に身体を抱え持ち上げられる。M字開脚に股間が割り開かれると、蒸れた肉襞や菊皺が伸ばされて、ひんやりとした外気に撫でられた。 それは搾乳の気持ちよさに淫汁を滲ませた恥ずかしい部分を村人の目に晒しているということでもある。
「ほら、これで入れやすくなったでしょ。お姉さんの後ろに立って、ウンチする穴にその肉棒を突き込めばいいのよ」
ミツキに導かれるままふらふらと姉の身体に吸い寄せられて行くリムルル。股間には長年使い込まれてきたように淫水焼けした肉筒が、天真爛漫なリムルルとの壮絶なギャップを醸し出しながらそそり立っている。
「はぁっ、姉様ぁ…入れるよ? リムルルのおちんちん、姉様のお尻に入れちゃうよぉ?」
「んむっ!?むぐぅぅ――っ!?」
妹に背後から抱きつかれると同時に、塞がれた視界の闇に稲光が走ったような気がした。熱く硬く有無を云わせぬ圧倒的な肉の塊が、括約筋を押し広げながら直腸の中へ侵入してくる。
「あぁぁっ、入るぅ!リムルルのオチンチンが、姉様の中にどんどん入ってくよぉぉっ!!」
体細胞の軟化処理と幾度となく施された肛門調教の成果として、たっぷりと濡れて柔らかく拡がるナコルルの排泄器官の中をリムルルの極太ペニスが難無く進んでいく。
容赦ない力がナコルルの括約筋をみちみちと拡げても苦痛は殆ど無かった。寧ろその先端が子宮の裏側に辿り着き、力強く突き上げて来るや、いよいよナコルルの女は悦びに打ち震え、膣内に豊潤な愛液を、全身の毛穴から乳牛独特の甘酸っぱい汗汁をどっと分泌してさらなる快楽を待ち望む。
「入ったぁ!根っこまで入っちゃったぁ!暖かいよぉ、気持ちいいよぉ、姉様ぁぁ!!」
「むぐっ!むぅっ!むぉぉ――っ!?」
リムルルがぐうっと腰を突き上げると同時に、その逸物が二倍にも膨れ上がったような気がし

た。目には見えずとも、男根を生やした妹に尻穴を貫かれているというおぞましいイメージがナコルルの脳裏に浮かび上がる。

それでも小さな手が乳房にめり込み、華奢な指先が不器用に乳頭部をこね出すと、すぐにナコルルの甘い呻き声と濃厚な母乳がじくじくと体外に漏れ始めた。

（あぁんっ、あくっ…ダメよ、リムルル…抜いて…抜いてぇぇ…）

尻穴にペニスが侵入する際には腸壁越しのGスポット打突、引き抜かれる際には疑似排便の悦楽。さらに軟らかい突起を無数に生やした極細の触手が処女膜を傷付けぬ慎重さでそろそろと膣道を擦（くすぐ）り、充血した小さな陰核を丹念に執拗に擦り上げ始めた。

心では拒みつつもナコルルの肉体は変態的な快感を求め、主の意思とは裏腹ににいやらしく腰を振り始める。

「はぁぁ、姉様ぁ…気持ちいいよぉ…姉様ぁ…」

「ふ、んむぅ…あむっ…うむっ、むぅぅぅっ…」

ぎゅぶっ、ぎゅぶっ、ぐぼっ、じゅぼっ…

「さ、そろそろ母乳も入れてあげるわ。お尻でたんと味わいなさい」

「あぁ――っ!?ダメぇ!きちゃうのぉっ!またなにかきちゃうのぉぉ――っ!!」

ぴゅっ、ぴゅっ、びちゅるるるぅーっ!!

「んむぉぉぉっ!?むごぉぉぉっ!んむぅぅぅ――っ!!」

まやかしの射精感に包まれると同時にリムルルの剛直が大量のミルクを噴き出した。高圧浣腸を受けたような衝撃にナコルルの内臓が踊り狂い、尿道を開放して膀胱の中身を搾り出す。

幼児の排泄ポーズで糞門を妹に貫かれたまま、陽光に輝く美しい黄金の雫を盛大に放出する光の巫女の姿が真正面から村人の目に晒された。

だが村人の殆どはその様子を正視できず、その場に力無く蹲（うずくま）っている。

「ちょっとジレったいわね」

冷徹なミツキの声にナコルルの口腔内を満たしていたミミズ管がずるりと抜け出した。そのまま嫌悪感を催す動きで姉妹を結ぶ肉の結合部を目指す。

「ひぃっ!な、なにを!?やめて下さい!そんなの入りません!う、うぁぁ――っ!!」

妹の肉棒を咥え込んで目一杯に広がったナコルルの肛門環に、魔蟲がその頭をめり込ませ始めた。求められれば何処までも伸びるよう改造された括約筋は、本人の意志とは裏腹に新たな浣腸用チューブの挿入を受け入れてしまう。

「な、なにこれぇっ!オチンチンに!オチンチンに巻き付いてくるよぉぉっ!!」

「イヤぁぁっ!リ、リムルルぅっ!動かないで!動いちゃダメェェェッ!!」

ナコルルの腸内でその分身にミミズ肉を絡ませたまま、容赦なくピストン運動を再開せんとリムルルが腰を引いた。圧倒的な質量の異物が肛門から引き抜かれようとする感覚に全身の毛がそそり立ち、それだけでナコルルは昇天しそうになる。

妹の陰茎とミミズ肉を美味そうに咥え込んで離さない肛門粘膜は、何処までも柔らかく伸長しながらめくれ返って行った。

「だ、だめぇっ!お尻が!お尻がぁぁっ!抜かないでリムルル!いひぃぃ――っ!!」

リムルルが肉棒の三分の二程を引き抜いたところで再び挿入の動作に移ると、さらに二匹目三匹目の魔蟲が肛穴の隙間を広げて潜り込んだ。前の穴にも微細な触手が相変わらず出入りし、無数に生えた疣でナコルルの膣壁と陰核を忙しく刺激している。

「あひぃぃっ!!も、もおらめぇぇっ!もう入らないっ!壊れるぅ!お尻壊れちゃうぅ――っ!!」

「はぁっ、はぁっ、姉様ぁ…気持ちいい…姉様のお尻の穴で、オチンチンがぎゅうって搾られるのぉ…」

透明なミミズがひしめき限界まで拡張された尻穴の中心で、周りの肉を巻き込みながらリムルルのペニスが往復する。その間にもカテーテルの役目を果たす魔蟲の胴が、ナコルルの腸奥深くへどくどくとミルクのエネマを注ぎ込んだ。

「リム…ル…も…もう…や、めて…うぅっ…んひぃっ!…お、なか…裂けちゃうぅぅ」

常人なら括約筋を断裂させ、腸管を破裂させるような責めを受けながら、膣と肛門への同時愛撫がもたらす悦楽に、ともすれば向こう側へ堕ちてしまいそうになる自分をナコルルは必死で食い止めている。

ずっちゅ、ずっちゅ、ずっちゅ、ぼぢゅっ、ぼぢゅっ、ぼぢゅるるるっ!!

「はぁっ!はぁっ!はぁっ!…ねえさまぁっ!イ、イク!またイクぅ――っ!!」

何度となく紛い物の精汁を放ちながら、リムルルの剛直はまるで萎えることもなく、体内より分泌される熱湯のような膿液と、ミミズ管の吸い上げる母乳をしこたま姉の腸内に注ぎ続けていた。あどけない顔を涙と鼻水でぐしゃぐしゃにしてやに濡らし、射精の瞬間は爪先立ちになって精汁を一滴も溢さぬよう注ぎ込んで行く。

ぴゅるるっ!どくっどくっどくっ…

「くはぁっ…いっぱい、いっぱい出るのぉ…姉様のウンチ穴、ぬるぬるで、きゅうきゅうで、止まんないよぉ…」

「うあっ!あっ!おあっ!くひぃっ!だ、駄目よ!リムルル!お、おっぱい揉まないでぇ!イ、イクぅ!イっちゃうぅぅっ!!」

膣壁を舐める触手の感触と、妹の肉棒が与える快楽に歯を食いしばって抵抗するが、あまつさえ幼い手に乳を搾られては甘い嬌声を上げて絶頂に達するしか道は無い。

後ろから突かれながらぴんぴんに勃起した乳首の孔を開放してミルクの放物線を描き、ついにナコルルはだらしなく開いた口から芳しい唾液に濡れる赤い舌を出して、はしたない歓喜の表情を浮かべた。

「あはぁ、姉様ぁ…お口で、しよ…あむぅ…ぷちゅっ…む、ちゅうっ…」

「ふむぅっ!ちゅ、ちゅうっ!むはぁっ!んひぃぃ――っ!!」

魔悦に堕ちた妹の唇と唾液を舌と口粘膜で味わいつつ、またしても切なくアクメを迎えてしまうナコルル。追いかけるように昇り詰めたリムルルがまたたっぷりと精を放ち、姉の腹部を水風船のように膨らませていく。

魔蟲の注ぐ母乳浣腸もどくどくと腸管を満たし、膨れ上がった乳房とボテ腹でナコルルは文字通り肉ダルマへと変化しつつあった。

「フフフ、すごいお腹ねぇ。こんなにたくさん飲み込んじゃうなんて、ナコちゃんは牛乳が大好きなのね」

「も、もう…らめぇ…やめへぇ…リム、ルル…おねが…い…」

ごろろっ、ぎゅるるるるっ…

「はぁっ、はぁっ、どうして…やめるのぉ?気持ちいいでしょぉ?ねえさまぁ…おっ!おはっ!はひぃぃんっ!!」

「く、苦しい…お腹が…裂けちゃうぅ…」

ナコルルに生じた変化を敏感に察知したミツキは、夢中で腰を振るリムルルを羽交い締めにし、後方へ引き離した。同調して後孔に潜り込んでいたミミズの束もずるりと抜け落ちて活動を停止する。

「はぁい、お終い。今日はこれくらいにしておこうね」

「いやぁっ!もっと!もっとぉ!姉様のお尻に入れたいよぉっ!!」

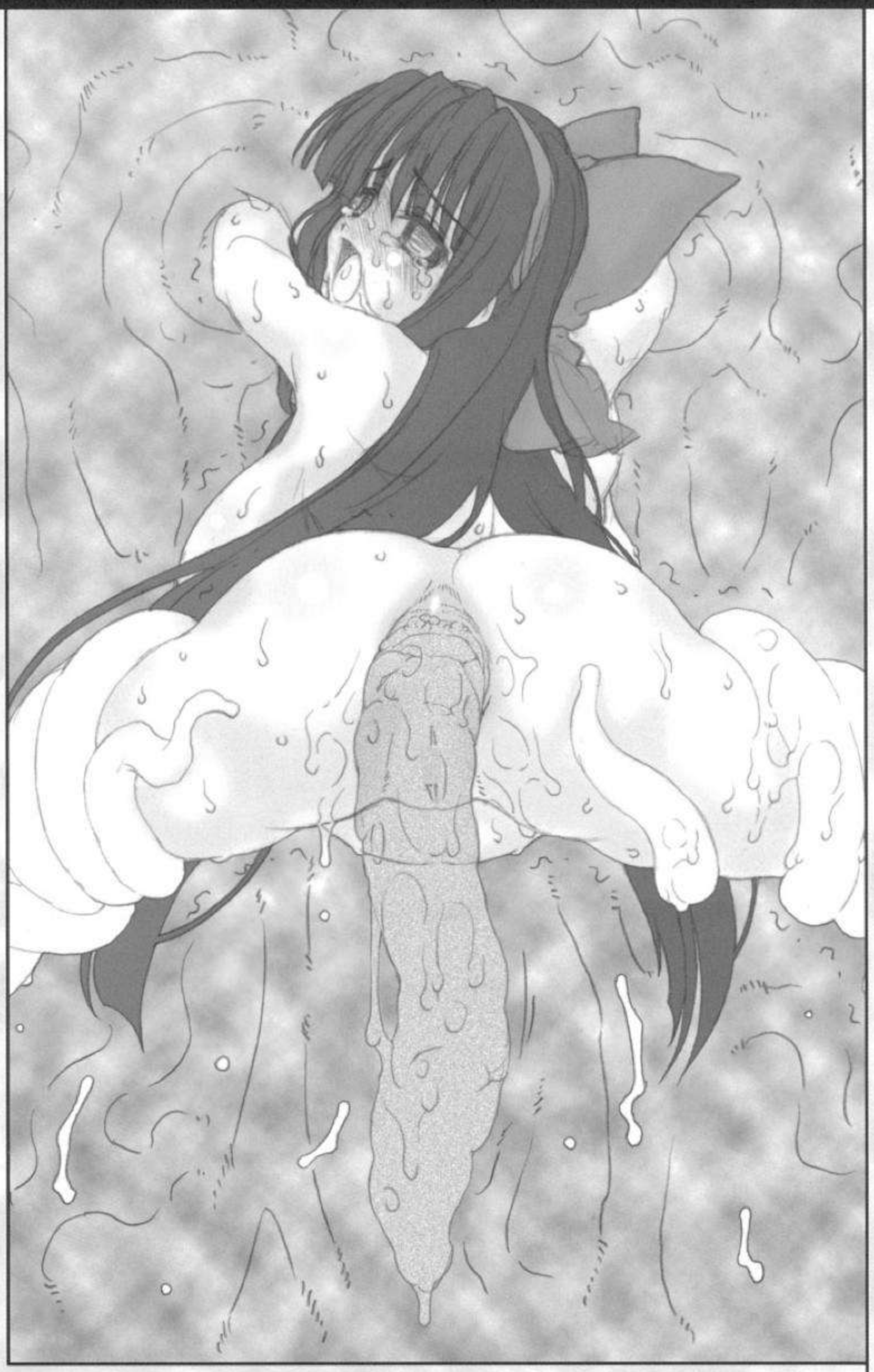
痩せ細った身体をじたばたとさせて、未だ猛々しく天を仰ぐ淫汁塗れの肉棒から物惜しげにぶりゅぶりゅと男汁を射出させるリムルル。宙を舞った黄白濁のザーメンミルクは振り向いていた姉の顔面にべちゃりとはりついたが、ナコルルがいま顔をしかめているのはそのためではない。今、彼女は猛烈な圧力から逃れようとする内臓の働きと必死で闘っているのだ。

ぐるるるぅっ、ぎゅるっ、ごろろっ…
「くっ！…はぁっ…はぁっ…ミ、ミツキさん…あのっ！」
「分かってるわ、ナコちゃん…お腹いっぱいになって、ウンチしたくなっちゃったのよねぇ？」
「っ…はい…かっ、厠へ…早く！！」
「厠ねぇ…そうだ、アイヌの民ってぇ、自然を大切にするんでしょう？」
「な、なにをするのですか…や、やめ…あぁっ！？」
邪悪なミツキの企みに従ってナコルルの尻を若芽生い茂る大地に向ける肉触手。水平まんぐり返しの姿勢は便意にひくつく菊蕾と淫汁に塗れた膣口、そして苦悶に歪む美少女のマスクを余すところ無くギャラリーの眼前に晒している。
目隠しをされていても感じる自身の身体に突き刺さる無数の視線…哀れな少女巫女は気が狂いそうなほどの羞恥に顔を耳まで紅く染め上げた。
「ミ、ツキさん！お、お願いです…こんな…恥ずかしい…はくうっ！でっ、出ちゃいます…」
「丈夫な木が育つよう、たっぷりと肥やしを蒔いてあげなさい」
「イヤです！こんなこと…どうして…どうしてこんなことを…いったい何のために…んひぃっ！？」
抵抗も虚しくナコルルの尻穴が周辺の肉ごと盛り上がり、括約筋の環が裏返って行く。ぴゅるぴゅると漏れ出していた白濁の飛沫はやがて一筋の奔流となり、肛門を押し広げさらなる黄土色の濁流となってどっと溢れ出した。
ブリュブリュブリュッブリュ――ッ！
「あぁぁっ！ひぃぃぃ――――っ！！止まって！止まってぇぇ――っ！！」
一頻（ひとしき）り体内で暖めたホットミルクが噴出され尽くすと、淫臭を纏った恥ずかしい下痢便がボチャボチャと周囲に降り注がれて行く。尻からの生肥やし直接散布は背徳的な快

楽を齎し、その意志とは裏腹に息み続けることをナコルルに強要した。
（みんな、見ないで…お願い…あぁっ！は、恥ずかしいっ！…もう…もう死んでしまいたい）
幼馴染たちの視線を感じながら下品な音と共に一際遠くまで糞便を噴き飛ばした瞬間、ナコルルの中で何かがブツリとはじけた。
「ひっ！ひぃいっ！いいのぉっ！ウ、ウンチ気持ちいいのぉっ！見てぇっ！ナコルルのドロドロウンチ、見てぇぇっ！！」
ムリュムリュムリュッ！！ブボボッ！ブビィイーッ！！
その美しさ、愛らしさ、可憐さに憧れ、畏敬の念すら抱いていた絶世の美少女巫女が今、自分達の目の前で乙女にとって最も見られたくない痴態を晒している。
ナコルルと同世代の村の少女達は羞恥に頬を赤く染めながらもその惨たらしく妖艶な光景から視線を逸らせず、これ程の汚辱にまみれてもなお色あせず輝く美しき光の巫女の姿に釘付けになっていた。
そんな中排泄視姦スイッチの入ってしまったナコルルは瞳孔の開いた眼から涙を流し、小さな舌の先から涎を飛ばしながら、いよいよ下腹部に力を込め始める。
「んひぃぃ――っ！？で、出ちゃうっ！！あひぃっ！お、大きいのが出てくるぅっ！！」
大量の軟便を搾り出して脱肛気味に裏返ったナコルルの排泄孔が、さらにじわじわと広がり始めた。やがて白く艶やかな塊が頭を出し、そのまま長大な一本糞のように尻からぶら下がってくねくねと蠢く。
「うふふっ、蟲まで捻り出しちゃって…その大きさなら思い切り息まなきゃ出てこないわよ」
ナコルルは肛門からまろび出た極太淫蟲を排出せんと顔を真っ赤に上気させながら腹筋を引き絞った。半ば錯乱した意識下にあって、いま彼女はただ胎内の異物を排出せんと本能のまま

振舞っている。
「はぁっ、はぁっ…うっ！…うぅんっ！！…んくっ！…くはぁぁっ！！」
懸命に息みながらゴム管のような蟲の身体を直腸からゆっくりとひり出してゆくナコルル。それは糞門で味わう排泄の快楽を余すところ無く伝え、ついに光の巫女の肉体は自ら淫悦を貪るように乳孔までも開放して濃厚なミルクを噴出しはじめる。
「ひぁっ！…あっ！…あひぃんっ！…で、出ちゃうのぉ…蟲も、ウンチも、オッパイも出てくるぅ…気持ちいいよぉっ！！」
びゅうびゅうと噴き出す母乳はナコルルのきめ細やかな美肌を伝い落ち、肛門からうねり出る魔蟲の身体を黄白色に染め上げる。
「ぬ、抜ける！抜けちゃうのぉっ！抜けたらイっちゃう！またイっちゃうぅーーーっ！！」
ぼちゅぅぅっ！！ぶちゅるるるーーっ！！
ついに腸汁を飛び散らせて極太の糞蟲がナコルルの肛門から産み落とされ、大地に広がった液状便のベッドにその身を横たえた。
余韻を楽しむかのように全身の穴という穴から汗や尿、腸液や乳汁を垂れ流しながら、光の巫女は闇の中へその意識を沈ませて行った。

禍々しい形をした触手がするすると這い上がり、立ち前屈姿勢に拘束されたナコルルの肛穴に二本、三本と滑り込んで行く。
先刻よりナコルルは不気味な粘液を腸内に流し込まれては排出するというプロセスを幾度と無く強要されていた。
「はぁっ、はぁっ、はぁっ…うぅっ…」
これだけ執拗な浣腸責めも初めてのことだ。しかも通常の液体浣腸とは異なり注がれる粘汁は腸の中で速やかに固形化し、丸々と太った蟲を絡めて排泄されるために肛門通過時の快感が只事ではない。ナコルルは露知らぬことだが、彼女の直腸粘膜にはイボ状の突起が幾つも生え、大便や異物が触れて擦れる度に、陰核レベルの快楽が生じるようになっていた。
「も、もうやめてください…おかしく、おかしくなっちゃうぅ…もうウンチするのはイヤぁぁ…」
子猫のような声で啼くナコルルの可憐さとは裏腹に、その下腹部は妊婦のように丸く膨らんで行く。全身の肉と骨を軟化し、萎えさせてしまう妖液が絶えず彼女の皮膚に染み込み、その体組織を柔軟に変化させていた。
腐汁で光る肉壁に半ば取り込まれたかの様に両腕をめり込ませ、雪のように白い肉桃を大きく後ろに突き出したナコルルは、自らの撒き散らした汗糞尿その他様々な体液にまみれ、ただ為されるがままぐったりとしている。
しかしこれ程の淫辱にまみれながらそれでもなおナコルルの瞳には光の巫女としての強い意志が宿っていた。
（負けない…私が負けたら…村の皆は…大自然はどうなってしまうの…）
調教と肉体改造の齎す快楽の海へ何度も身を投じかけ留まって来たのは、村を救えるのは光の力だけという強い信念と矜持に依るものだった。だから糞を垂れながらアクメを迎えるような痴態を二度と村人達の前に晒す訳には行かない。
しかし――
邪神の性奴隷などには堕するまいと抗いつつも、妹の精神（ココロ）を正常化する条件に三世代目の蟲卵を飲んでしまったことが彼女の心を揺さぶっている。
（はぁっ…ま、また…お腹が張ってきてる…）
そんなナコルルの意志を挫くかのように、腸管をいっぱいに膨らませた疑似宿便がまた直腸に下りて来て、有無を言わせぬ強い便意を突き付ける。恥ずかしくて気持ちいい排便行為への期待に、女陰からねっとりとした白濁汁が溢れ出して卑猥に糸を引いた。
薄桃色のアヌスを盛り上げて、おねだりするように濃厚なマン汁を垂らすナコルルが愛しく、ミツキはその桃尻にすりすりと頬を擦り付ける。
「さぁ、私の可愛い雌牛ちゃん…またたくさんウンチしようねぇ」
ミツキの合図にまたも触手の束がいやらしく絡み付き、ナコルルの股間を引き裂くようにしなやかな両脚を開かせてゆく。一八〇度近い開脚を強要され、丸出しになった秘裂と菊門が後ろに配置された鏡の中でひくついているのがよく見える。
「やっ、いやです…せめて、せめて厠で！…はくっ！…うっ、う～っ！！お尻が、お尻がぁぁっ！！」
日々乳牛へと変化して行く肉体は排泄器官すら特異に発達させ、もはやそのコントロールが困難になっていた。ナコルルがいくら恥じらい拒んでも、彼女の肛門はそれ自体が自律しているかのように淫らな収縮を始める。
「んふっ！んむっ！んううっ！！くはぁっ！み、見ないでみんな！お願いだからもう見ないでぇっ！！」
アヌスそのものが勃起するようにはしたなく膨張を始めると、ナコルルは嫌でも下腹を搾るように力まされることになる。
あらゆる姿勢で嬉々として排便の姿を披露する変態露出巫女――
声の届かぬ鏡の向こうで、村人の目にナコルルはそのように映っているはずだ。
「ナコちゃんてばぁ、またイっちゃうのねぇ？ウンチしながらイっちゃうのよねぇ？ほら、一緒におっぱいも搾ってあげるから、思い切り出してイっちゃいなさい」
お腹に負けず張りつめたまろやかな両の乳房をミツキのしなやかな手が鷲掴みにする。噴乳の期待にむっくりと頭をもたげた肉太乳首を指で挟み、伸ばすように転がすように柔らかくこね廻した。
くにゅっ、くにゅっ、くにいっ、くにいっ
「ひいいっ！おひいいいっ！！ちっ、ちくびダメぇっ！！出る、出る出るぅ！！おっぱいも！ウンチも！ぜんぶ一緒に出ちゃうのぉっ！！」
可愛らしく窄まっていた尻穴が肉筒状に外側へまろび出し、赤子でも生める程にその径を広げ始める。やがて体内で作られた臭くて恥ずかしい塊がぬっと頭を出すと、両手で掴める程の太さを保ってゆっくりと垂れ下がった。
ミツキの愛撫を受けた双乳もまた濃厚な固化ミルクを練り出そうと内側から乳腺を押し広げて行く。
ヌチッ、ヌチッ…ヌチヌチヌチィッ…
「あひっ！ひぃっ！で、出るっ！出てくるっ！おっぱいとお尻から…ふ、太いのが出ちゃうのっ！！気持ちいい！気持ちいいよぉっ！！」
常人の数倍に高められた排泄快楽が、ナコルルの守り抜いてきた最後の正気と羞恥心を吹き飛ばす。食いしばった歯の隙間から涎を垂らしながら露出の悦楽に身を任せ、大きな尻と胸からの究極の排便ショーを披露せんとナコルルは真っ赤になって息んだ。
「んうっ！ん、んふぅ！ふむっ！ふんぬぅ～っ！…かっ、はぁっ！？イ、イクっ！イッちゃうっ！！」
みっちりと肉の詰まった固めの疑似便塊が、点在する直腸陰核を引っ張るように滑り抜けて行く。同時に胸の膨らみをたんまりと満たしていた乳塊が、広がった乳首の先からねっとりと溢れ始めた。
モリュモリュモリュッ！ムニュルルルウッ！
「あひいいっ！！ひっ！ひあぁぁぁ～～っ！！いっぱい出るのぉっ！！し、搾ってぇ！！ナコルルのウンチとおっぱい搾りだしてェッ！！おっ！ほおっ！んほおおオォッ！！」
脳天を貫くような強烈な悦楽にたちまち絶頂を迎えたナコルルは、ミツキに搾乳されたままガクガクと痙攣し、泡を吹いて盛大に小便を漏



らし始めた。一体、その華奢な身体の何処に詰まっていたのか、人間離れした量の排泄物が全身の開き切った恥穴からムリムリと産み落とされて行く。

「はぁっ・・・はぁっ・・・はひぃぃ・・・も、もう・・・止め、止めれぇ・・・」

もはや息まずとも溢れ出す連続排便のエクスタシーに、ナコルルは呂律も廻らずただ芋虫のように身をくねらせるしか術は無い。

「ね、分かる？ナコちゃん。ウンチの匂いが変わってきたでしょう？」

果てしなく続く排泄地獄の中で、むんむんと漂う大便特有の臭気に僅かずつだが甘酸っぱいものが入り混じっていることにナコルルは気付かされた。ぼんやりと股間に視線を移せば、菊皺を押し広げてぶら下がっている羞恥の塊が、濃厚な黄褐色から黄色味がかった灰白色へと変化し始めているのが見える。

「はっ・・・くひぃっ・・・こ、これって・・・なにを・・・んむっ！・・・なにをしたんですか！？・・・あひぃぃぃっ！！」

ぬるっと便塊の最後の部分が飛び出して、異常排便に戸惑うナコルルに再び大きな快楽の波が訪れた。貝肉の合わせ目と脱肛気味にぽっかり開いた菊座の穴から涎の如く白い粘液が垂れ下がり、床で山盛りになった排泄物に生クリームのトッピングを施していく。

「知りたい？・・・そうね、上手にウンチできたから教えてあげるわ」

乳牛としての完成を見せつつある少女のいじらしさにミツキは蕩けるような愛情を以て接していた。涎に汚れたナコルルの唇を舌先できれいに舐め取り、そっと地面に下ろして触手で天地逆さのまんぐり返しに固定する。

赤いリボンと皮靴もそのままに、可憐な少女が無毛の割れ目と肛門を晒し、その傍らに山積みとなった排泄物が湯気を立てる光景を邪眼の鏡面が冷たく写し出していた。

「いい？ ナコちゃん。戦場に於いて負傷者を速やかに癒すのが乳牛本来の役目・・・貴女はすでに栄養たっぷりのお乳が出せる・・・でもね、それだけじゃないの」

「は、ぁ・・・んひぃっ！・・・そ、そんなところ・・・き、汚いです・・・」

ナコルルの股間に顔を埋めて存分に匂いを楽しんだ後、肛肉のまろび出た菊壷にミツキがその赤く長い舌を優しく這わせた。腸液と排泄物の残滓を丹念に舐め取ってから、さらに恥穴の奥深くまで舌を挿し込み、直腸粘膜を隅々まで味わい尽くす。

「あぁっ、あふっ・・・はくぅ・・・切ないです・・・そんなにされたら・・・また・・・催してしまいます・・・」

ミツキが己の糞便を啜り出したことには然したる動揺も覚えず、肛門内部を舌で舐（ねぶ）られる心地よさにナコルルは陶酔した。母乳に限らず分泌されるあらゆる自分の体液を、ミツキは常に愛情を込めて味わってくれる。小便の風味を品評されるなど始めは恥辱でしかなかったはずなのに、今は大自然に於ける動物の母性愛にも似た奇妙な安堵感をミツキの愛撫に感じることが出来た。

「ん～、ちゅうっ・・・うぅん、いい感じ・・・だんだん甘味が出てきたわぁ・・・ほら、また息んでみて」

「も、もういや・・・恥ずかしいのは、イヤです・・・うぅーんっ！・・・んくぅっ！・・・くむぅっ！！」

恥じらうナコルルの意志に反して、またも息まされてしまう。もはや正常に排泄することすら叶わぬのなら、いっそ雌牛と成って乳糞尿を搾り取られ歓喜に戦慄（わなな）くのが自然な姿なのではないか。

「出てきた出てきた・・・はむぅっ・・・むぐむぐ

…」

桃尻の頂点で隆起した肛門からじわじわと這い出してきた便肉の先端をミツキはためらいもなく口に含んだ。しばらくそのままおしゃぶりを楽しんでから噛み千切り、出来映えを確認するかのように時間をかけて咀嚼する。

（た、食べてる…私の出したものを…噛んで…飲み込んでる…）

悪夢のような食事光景を見せられたにも関わらず、ナコルルの中には奇妙な感情が湧き起こっていた。強い情欲がぞくりと全身を走り、僅かな嫌悪感をも飲み込んでしまう。

性欲の異常な高揚に女の部分がじくじくと熱を帯び、ナコルルは初めて自らの指で性器を慰めたい衝動にかられた。

「ん、上出来ね。大便特有の苦みも消えて…これで準備は整ったわ」

「なんの…準備ですか…？」

ミツキは質問に答えず、口の周りにこびり付いた食滓をペロリと舐めて、傍らにとぐろを巻くホースのような触手を手繰り寄せた。異界の生物は悦ぶようにぶるぶると震え、主人の意志を読み取って、嘴の一つをナコルルの豊乳へと巻き付かせる。

「はぁぁっ！はぅぅぅっ！おっぱい、搾ったら！…くはぁぁっ！出ちゃいます！！」

根元から捻り上げられて噴乳しかけた乳吻を、触手の先端がぱくりと咥え込んだ。ぴゅうっと宙へ放たれるはずだったナコルルの練乳は、代わりに搾乳のチューブへ滾々（こんこん）と注ぎ込まれて行く。

「ひいいっ！んひいいっ！おっぱい！おっぱい出てるぅっ！！ はひいいいっ！！」

溜め込まれたミルクの排出に白目をむくナコルルをミツキはしっかりと抱き寄せて、触手チューブを十分にほぐれた尻の穴へ深く挿入する。度重なる浣腸で空っぽになったナコルルの腸管は、再び自身の甘く暖かい母乳で満たされていった。

「うぅっ！お、お腹に…おっぱいが…くぅっ！ミツキさん、やめて！やめて下さい！」

「これくらいでネを上げてどうするのぉ？これこそが乳牛秘中の秘技よ。搾りたての新鮮なお乳をお腹の中でじっくり醸成させるの」

「お、お腹で…どうして…どうしてそんなことを…？」

股間丸出しの天地逆さま状態で母乳浣腸に下腹部をせり出しながら、可憐な容姿だけはそのままに涙目のナコルルが悲痛に叫ぶ。ミツキの手が触手を一際握り締めれば、両の乳首に吸い付いた肉管へいよいよさかんに母乳がしぶき腹を膨らませた。

「んふっ！…んぅぅんっ！…んくっ、ひいいっ！！…らめぇっ！いっぱい出ちゃうっ！！おなか、おなかがぁっ！！」

「そうしてできた貴女の排泄物はね、重体の怪我人すら直ちに完治させる最高の滋養食になるのよ」

「――！？」

重傷者に乞われ、その口に大便をひり出す。おぞましい乳牛の奉仕する姿がナコルルの脳裏に浮かんだ。

「ね、嬉しい？ みんなが貴女のウンチを食べたがるの…分かるわ、ナコちゃんのここ、ぐちゃぐちゃになってるもの」

「ちっ、違います！…お尻を…お尻をさっきみたいされれば誰だって…」

ミツキの言う通り、女の本音がゴムの樹液のように割れ目から滲み出しているのが分かる。乳牛のイメエジに戦慄しながら何処か甘美な感情を抱いている自分にナコルルは戦慄した。

その心理状態を知ってか知らずか、ミツキの手は容赦なく触手を握り締め、哀れなナコルルの腹を無様に膨らませている。

「ハァッ、ハァッ…く、くるしい…も、もう…許して…お願い、です…ぅぅっ…！」

限界まで膨らんだナコルルの腹に青く血管が浮き出し、臍までもが飛び出してきたのを認め、ようやくミツキは母乳浣腸の手を止めた。胃がせり上がる程の圧迫感にナコルルはもう声もなく、ただ短い呼吸を繰り返している。

「苦しい？でもすぐに慣れるわ。貴方の身体は色んなところが軟らかぁく伸びるようになってるから。それはお腹の中も同じ」

たまらずナコルルが胃の内容物を逆流させてもミツキの表情に変化はない。丸い風船腹を愛し気に撫で廻しながら、あまつさえさらなる苛烈な乳牛としての運命を犠牲者の耳にそっと囁いた。

「フッフフフ、おなかポンポンね…さっきも言った通り、これから数日かけて、このお乳を美味しく美味しく練り上げてちょうだい」

ナコルルの乳首に吸い付いてた触手チューブを引き剥がしながら、尻の穴に人差し指を宛がい呪詛めいた言葉をミツキが呟く。徐々にナコルルの肛門からは感覚が失せ、肉が塞がってしまったかのように開くことも閉じることも叶わなくなった。

ミツキが立ち上がるとまたしても様々な形状の触手が押し寄せて、大量浣腸に喘ぐナコルルの敏感な部位を繊毛絨毛で切なく擦り始める。

「好きなだけ自慰をしてお乳を搾って苦しみを紛らせるといいわ…そうそう、お尻の穴はね、お姫様の接吻でなければもう開かないよう禁呪を施しておいたから」

「お、お姫様って？…そんな…あっ…くっ、はぁっ！…うぅっ…んひぃっ！…待って、待って下さい！…んはぁっ！！」

ぎゅるぎゅると呻く腸管の痛みを触手の愛撫が確かに和らげてくれる。

数日後に待ち受ける恥辱のステージなど想像もつかぬまま、変態マゾ性欲に覚醒し始めたナコルルの白い裸体は苦痛と快楽の深い闇襞に閉じ込まれて行った。

やけに甘ったるい、それでいて何処か青臭い匂い、そして身体中をナメクジが這うような感触に刺激され目が覚めた。

「う…こ、ここは…？」

ぶよぶよとした触手が四肢に巻き付き、便座にしゃがむような格好で宙吊りにされている。その点は以前とさほど変わらないが、薄闇に浮かぶ光景が調教小屋と異なっていた。

数日ぶりの冷えた空気に肌を刺され、いやらしく熟れた肉体がぶるっと痙攣する。肥大した二つの果実もゆさゆさと揺れて、寒気に尖った乳首が甘い電気をびんびんと脳髄に伝えてきた。

じめじめと息の詰まる調教小屋から開放されたのは久しぶりのことだ。だがその開放感を味わう余裕はナコルルに無かった。

たっぷりと濃厚な母乳を注腸されてから数日、彼女に排泄は許可されず、意識が戻るにつれ、再び猛烈な便意が甦ってくる。

ぐりゅっ、ぐりゅりゅりゅりゅっ、ぐぅぅぅっ…

「はくぅっ…痛っ…！」

「あら、お目覚めですの？」

ぎょっとして声の方を振り返ると、蒼白く端正な顔立ちの少女と目が合った。長く艶やかな黒髪を精巧な飾り物が彩り、西洋人形のように高貴な面持ちで、はにかむように微笑んでいる。

「あ、貴女は…？」

「ごめんなさい、私はここへ来る乳牛（ちちうし）の毒味を命じられているのです」

耳に心地好いその声が告げる内容はしかし、過酷な現実をナコルルに思い起こさせた。艶声の美少女は起伏に乏しい少年のような裸身を晒したまま、赤い舌を伸ばして怯える乳牛の肌を丹念に舐め廻し始める。

これこそがナメクジの正体であった。

「や、やめてください！そこは…そこは不浄の箇所！い、いけません！くぅっ！あっ！いやぁぁっ！！」

ナコルルのむっちりとした尻肉にたっぷりと唾液を塗り付けた柔舌が、やがて終端の窄まり

へ辿り着く。ミツキの術に封じられた恥蕾の皺一本ずつが、生暖かい舌先の丹念な動きにほぐされて行った。

「んっ！んはぁっ！だ、ダメェッ！そんなところ！き、汚いです！！」

眉間を歪ませながらもその感覚にびんびんと脳髄を打たれ、ナコルルの快楽中枢が熱を帯び始める。その意志に反して固く閉じていた括約筋が徐々に弛み、重く張り出してぎゅるぎゅると唸る腹の中身をついに搾り出せると幼顔に歓喜の表情を浮かべかけた時、聞き慣れたミツキの声が静かに闇を裂いた。

「各々方、常なるよう楓姫の肛門愛撫で術が解けまする。乳牛と化した光の巫女の狂態、とくとご覧あれ」

「――！？」

触手がざわめき足がぴたりと床に着いた。いや、床というには感触として余りに違和感がある。室内にすうっと薄明かりがさし、ようやくナコルルは己の置かれた状況を察した。

「はぁぁぁっ・・・こ、これは・・・！？」

大きな丸テーブルの中央に盛り上がった奇妙な形をした台座の上にしゃがみ込んだナコルルの尻を、やはりテーブル上に跪（ひざまず）いた少女が丹念に舌で愛撫し続けている。テーブルの周囲には幾つもの黒い影が座し、無言でその醜態を睨め付けていた。

和式便所で用を足す姿を四方八方から見つめられているようなものである。仰天したナコルルは慌てて括約筋に力を込め、頭を出しかけていた腸内容物を腹の奥に押し戻した。

「なっ！なんですかこれは！？ミツキさん！これはいったい！・・・ひっ！？」

足の裏側に違和感を覚えて見下ろせば、その便座は手足を縛る触手にも似てぶよぶよと暖かく、それでいて透き通り尚かつ脈動している。おまけに蹄鉄の形をしているから便壺の役目は果たさず、放たれた汚物はただテーブルの上に垂れ流されるに違いない。

金隠しなどとはいうが、この便器は使用者の何もかもを晒し辱める邪悪な代物であった。

「苦しそうね、ナコちゃん・・・よくガマンしたわ。これから皆の前で、たっぷり排泄させてあげるから」

猫撫で声で残酷な言葉を放つミツキを涙目で見つめ、肛門愛撫に噎（むせ）ぶ可憐な巫女は、大便スタイルに四肢を拘束されたままイヤイヤと首を振った。

真っ赤なリボンがふるふると揺れて幼気な犠牲者の哀れさを強調しても、冷徹なミツキの眼は細くつり上がるばかりだ。

「どうしたの？・・・今までさんざん”ウンチさせてウンチさせてぇ”って喚いてたくせに」

確かにナコルルの臨月腹には胎児の代わりにたっぷりと母乳が詰まっており、乳牛特有の腸内細菌と反応してはさかんに発酵を続けている。暖められて練り上げられたクリームチーズのような内容物は腐敗ガスをたんまりと発生させ、腸管の隅々までをパンパンに膨らませていた。

一刻も早くそれを押し出してしまおうとナコルルの内臓はうねり、苦悶の悲鳴を上げている。

「だ、だって・・・イヤです・・・みんなの見ている前でなんて・・・ここはいったい、何処なんですか・・・」

「フフフッ、そんな事、すぐに考えられないようになるわ」

ミツキの言う意味は解せぬが、何れにせよ逆らうことも叶わない。楓姫と呼ばれた少女のアニリングスにナコルルの肛門は少しずつ膨らみ、用便を許されたことで体内の防衛本能が働きを高め、全身の細胞に排泄の命令が下ったかのようだった。

ぎゅるるっ！ ぐりゅうっ！ ごりゅりゅりゅりゅっ！

「はぐっ、ぐっ、ううぅっ・・・お、なかが・・・もうダメェェ・・・！！」

「ナコルル様、どうか楓に、楓の口に・・・貴女様の腐乳餌をお授け下さいまし・・・」

そう囁いた楓の暖かなナメクジ舌が驚くほどの長さで直腸の中に潜り込み、いきなり風船のようにその容積を増大させた。ただでさえ圧迫されていた腸管を拡げられて声にならぬ悲鳴を上げるナコルルを余所に、舌はその大きさを保ったまま再び引き抜かれて行く。

柔肉処理された肛門環は猛烈な力にみるみる変形し、餅のように伸びて外に飛び出した。生きたまま直腸を抜かれるような感覚にナコルルは悶絶し、大きな目玉をぐるんと裏返す。

「ひっ！ひ・・・ひぎぃぃぃっ！！で、出るうっ！全部、出ちゃうぅぅっ！！」

ぼぢゅっ！と熱い腸液を飛び散らせ、瘤状に丸まった楓の舌が一気に引き抜かれた。たまらず腸粘膜がべろんと裏返り、腸液混じりのガスが噴き出て淫ら極まりない匂いが辺りに立ち込める。

ぶぢゅるるるっ！ぶびびびぃぃっ！！

ぶしゅぅぅぅっ！！

清楚な美少女巫女の尻から噴いた恥臭を全身に浴びながら、毒味役である楓姫は妖艶な笑みを浮かべ、さらなる豊饒に心を躍らせる。

「おお、あの尻穴を見てみよ、赤子の頭でも入りそうなほどに拡がってゆくわ」

実際、影法師の一人が呟いた通り、ミチリミチリと粘つく音を響かせながら腸内発酵物質を練り出さんと、ナコルルのアヌスが内部から押し開かれて行く。異常なまでに鋭敏化された排泄感覚に全身の毛穴が開き、快楽の信号がぞくぞくとナコルルの脊椎を這い上がった。

「あ、お・・・んぉおおおっ！！さ、けるぅ・・・っ！お尻裂けちゃうぅっ！ウ、ウンチがぁっ！お願いです！見ないで、見ないでえぇっ！！」

程なく人糞らしからぬ艶やかなクリーム色をした腸内物質が目を見張る太さで頭を出し始め、それだけで周囲に得も言われぬ異臭を漂わせる。それは居合わせた者全ての原始的なリビドーをかき立てる匂いであった。

ミチッ・・・ミチッ・・・ミチミチミチッ・・・

にゅるぅぅっ！

「あ・・・あぐ・・・うぐ・・・ん、ぐっ・・・むふぅぅっ・・・」

桃尻の谷間から生み出された氷柱のような乳牛便が、ナコルルの尻の下に跪（ひざまず）いた楓姫の大きく開いた口にねじ込まれて行く。どっしりとした糞肉は楓の舌に乗り、排泄の力に押されて咽の奥へと進んで行った。

「はむっ・・・むちゅっ・・・ぐちゅっ、もちゅっ・・・んぐっ・・・ごくっ・・・」

むつりと千切れた腐乳餌を口一杯に頬張り、咀嚼し飲み込む楓姫。あくまで高貴な面持ちを崩さず、長い舌を出してペロリと口の周りを拭った。

「嗚呼・・・何と甘美で芳香も風味も豊かな・・・舌が蕩けそう・・・これ程美味しい腐乳餌を食したのは初めて・・・流石は光の巫女、素晴らしいですわ・・・」

「よく頑張ったわね、ナコルル・・・この楓姫が喜ぶ腐乳餌を生み出せる乳牛はそうはいないわよ」

「くはぁっ・・・イヤぁ・・・もうイヤぁぁ・・・」

最初の塊をひねり出すと尿道の緊張がほぐれ、黄色い雫もまた放たれる。余りの羞恥に耳までも赤く染めたナコルルが涙目の顔を上げるのに合わせ、いつの間にか傍らに立っていたミツキの唇が重ねられた。

唾液を与えながら胸の膨らみに手を添え、固く尖った乳頭を指の腹で廻すように転がすと、ナコルルの柔肌がぶるっと震え、じくじくと暖かい母乳を分泌し始める。

「はむぅぅっ！あ、あふぅっ・・・で、出るのぉ・・・ひっ、くっ！・・・ウンチ・・・おなかいっぱいのウンチ・・・どんどん出ちゃうのぉっ！！」

ミツキとの唾液交換を歓喜するかのようにナコルルの肛門がまた広がり、ペースト状の軟便が堰を切ったようにぬるぬると溢れ始めた。

胸より迸る母乳、はしたなく噴き出す尿、そして尻穴からひねり出される得体の知れぬ物質。ナコルルの一部とも言える排出物の全てが楓姫

に降り注ぎ、またテーブルの上に広がって行く。
むにゅるるるぅ〜っ…ぼちゃっ、どぶんっ…
「あぁぁ、甘露！何という歯触り、何という濃厚な風味！…もぢゅぅぅっ！こんなに沢山…はむっ、はむぅっ」
ついに黒髪を振り乱して這い蹲（つくば）り、テーブルに飛び散ったナコルルの腸内発酵食品を舐め取り食り出す楓姫。その姿にナコルルはまたいやらしい愛液を滲ませていた。
己の体内で作り出したものを美味しく食べて貰うことが乳牛としての最上の悦びである。自身のひり出した排泄物を貪り食われる事で色欲を昂らせてしまったナコルルは、遂にその気高く清らかな魂までをもおぞましい淫悦に侵食され始めていた。
「むぅぅ、ミツキよ…楓姫をここまで狂わせる乳牛を育てるとは。ぬしの手練、さぞや羅将神様もお喜びになろう」
「有り難き幸せ…さ、ナコルル、猊下にご挨拶なさい」
「かはっ！あ、ああっ！…は、はいぃ…私は…ち、ちちうしのナコルルですぅ…私のお腹で作った美味しいウンチを…たくさん召し上がって下さい…ふうっ！んっ！うくううう〜〜っ！！」
ムリュムリュムリュッ！ブボッ！ビチビチビチビチィッ！！
乳牛としての誓いを口に、思い切り気張ったナコルルの尻から残便が勢い良く噴出して辺りに撒き散らされた。闇に堕ちた光の巫女を労うように優しく腕に抱きながら、ミツキがまた凶悪な笑みを浮かべて宣言する。
「この娘は他の乳牛たちの糞を食し、より滋養度の高い黄金肉を生成することができます。また腸管の随所に設けた仔房で幾匹もの幼蟲たちを育て、孵すことも…」
ぶすっ！ぶりゅぶりゅぶりゅぶりゅうっ！
「あひぃぃぃぃん！た、たくさん出ちゃうのお

っ！！おひぃぃぃっ！！」
ミツキの言葉を待たず、丸々と太った蛆のような蟲がナコルルの肛門から次々とひり出されてきた。
肛門出産の悦びに涎を垂らし痙攣する浅ましい巫女の姿を、その場に居合わせた全ての者が感慨深く見つめる。斯くも淫らな乳牛が羅将神に捧げられれば光の力は大きく削がれ、反するように闇は増大するだろう。
「更なる排泄調教の果てに光の巫女は完璧なる至高の乳牛へと変貌するでしょう、そうなれば究極物質ツ＝マの生成も容易いもの。それを供物として儀式に利用すれば…我らが全知全能の主、アンブロジア様が復活なされる”その日”もぐんと早まりましょう」
ナコルルの尻を愛しそうに撫でながら、彼女にとっての悪夢を淡々とミツキが語った。
胡乱な表情でミツキの言葉を聞きながら、ナコルルは切なそうに上下の口から粘着く雫を滴らせていた。
「はあっ…はあっ…うっ！…あっ！あはあっ！だ、めぇ…ま、また出ちゃうっ！はおっ！おひゃあぁぁっ！！」
ぼぶっ！ぶっ！ぶりりっ…みちっ、みちみちぃ…
血脈胎動する肉壁に囲まれた広間に少女の嬌声が響く。
張り詰めた括約筋の輪を裏返し、鮮やかな紅色の腸肉をはみ出させながらナコルルはもう何度目になるのか分からない放糞行為の激悦に背筋を仰け反らせた。
床や壁から延びる人間の各部位を模した様々な種類の触手によってナコルルの華奢な肢体は右腕足、左腕足をそれぞれまとめて拘束され、

股間を一八〇度以上に引き裂かれた姿勢で天を仰ぐように宙吊りにされている。
びしょ濡れの大陰唇からは鮮美な桜色の幼い粘膜がいやらしくはみ出し、淫らに発達した肛門は周囲の肉まで盛り上げて、乙女らしくひっそりと窄まっている筈の排泄孔は残酷なまでに開ききっていた。
「くはっ！あっ！おおっ！で、出ちゃうのぉっ！！…ウンチぃ…ウ、ウンチ止まらないのぉっ！！んおおっ！き、気持ちいヒィッ！！アヒイイィッ！！」
あどけなさと妖艶さの同居する美麗な面立ちをだらしなく歪ませ、舌を突き出して喜悦に咽ぶナコルルの肛門から、透き通るように輝く琥珀色の恥塊が凄まじい太さで垂れ下がっている。
圧倒的な質量の糞塊は決して千切れる事無く、長時間に及ぶ排泄行為の間ナコルルは一度も括約筋を閉じる事を許されなかった。苛烈な調教で刻み込まれた色責めの記憶が、その小さな身体に恥ずかしく息み続ける事を強要している。
「うんっ！うむぅぅっ！…ん、んぬぅーっ！は、くぅぅっ！！」
ぶうっ！ぶっ、ぶりゅ、ぶりゅりゅっ！…ムリッ、ムリムリリイィッ！
うっすらと恥辱の赤に染まった肉桃の下でとぐろを巻く物質は濃厚な甘い匂いを放ち、辺りに得も言われぬ艶美な香りを漂わせている。
「ほほほ…今日もご苦労なことじゃ、感謝するぞ光の巫女よ、ぬしの働きで我らの大願も間も無く成就される事じゃろう」
凄絶な排泄行為を続けるナコルルの傍らに女が佇み、口端を吊り上げて邪悪な笑みを浮かべている。
紅白の巫女装束に身を包み、長い黒髪をかきあげる妖艶の美女。この女こそ邪神アンブロジアを現世（うつしよ）に蘇らせんとす黒き巫女、羅将神ミツキその人であった。
「くはあっ！お、お願いします…もう許して下さい…これ以上は私…か、はぁっ！…んひぃっ！お、おかしくなるぅぅっ！！」
排泄に裏返った肛門肉環を仇敵の指先になぞられた瞬間、ナコルルの排泄孔は急激な収縮を見せて自身の太股ほどもある大径の蛇便を食い締める。腹腔の内圧をものともせず強烈に絞り上げられたアヌスの力で極太便はその進みを止めた。
「くうっ！こ、んな…ひど…いですぅ…うっ！ううんっ！くはっ！ああっ！ふ、普通に…ウンチさせて下さいっ！んおっ！おほおぉおっ！！」
「おお…美しいのぅ…愛らしいのぅ…そなたの可憐さはまさに天下無双よ、わらわをここまで情欲に狂わせるとは…さすがは至高の乳牛、光の巫女じゃ。アンブロジア様が蘇られた暁にはぬしに不死の術をかけ、永遠に我らの慰み者として愛でてやろうぞ…んっ、んちゅっ、じゅるっ！れろっ、れろれろぉ…」
「きゃひいいっ！！ひんっ！んやあっ！や、やめへぇっ！ほ、ほんろにおかひくなっひゃうのぉおっ！！おっ！おおおおぉっ！！」
淫術で排便を強制的に中断させられた状態のまま、伸び切った肉輪にぞろりとした感触が這う。異常なまでに鋭敏化した肛門感覚が哀れな少女剣士を瞬時に軽いアクメへと導く。
「ひゃひいいっ！！そ、そっちは！そっちはらめぇっ！！やはあっ！い、入れないれっ！んあっ！ち、乳首もしごいちゃらめぇっ！いっぎひいいぃ～～っ！！」
たくましい男根を模した肉鞭に豊かな双乳を搾り上げられ、はちきれそうな肉風船の先端ではしたなく勃起した乳首を腕触手の指で扱きたてられる。更にもう一つの排泄器官である尿道を舌触手が貫き、狂おしいほどに切ない排尿感を犠牲者に味わわせながら、その膀胱内壁を隅々まで這い舐め尽くして行く。
「あひゃあっ！！ひおっ！おひいっ！んおおぉっ！！イ、イクぅっ！またイッちゃうぅぅっ！！」
ぶしっ！ぶしゃあっ！しゃばばあぁぁ～～っ！！…ぬるっ！にゅるるるるっ！！ぶじゅるるっ！！ぼちゃっ！ぼちゃちゃっ！！
狂悦に蕩けた少女の絶叫と共に淫らな体液が爆ぜる。開放された乳孔からはヨーグルト状の母乳と乳塊、親指径にまで開いた尿道口からは透明な小水、そしてはしたなく肉房を広げた処女性器からは白濁の粘液をそれぞれ噴出しながらナコルルは白目を剥いて快楽の高みへと登りつめた。
「れろぉ、ちゅっ、ちゅるるっ、んほおぉ…これが光の巫女が練り上げたソーマ…美しいのぅ…まことに美しい色じゃ…雑じり気の一切無い完璧なまでに透き通ったこの琥珀色の糞塊…これが光の巫女の魂の色…んっ、んむっ、むじゅるるぅ…」
ミツキはナコルルの肛門肉に這わせていた舌を便塊へと移し、うっとりとした表情で舐め上げる。
邪神の手先である悪衆に捕らえられ、乳牛としておぞましい肉体改造を施されてから更に三ヶ月もの間排泄拷問に曝され続けたナコルルは、ついにソーマと呼ばれる物質を体内で生成できるほどにまで内臓器官を作り変えられてしまっていた。
光の巫女の持つ穢れ無き純白の魂、その美しき魂から無尽蔵に湧き上がる霊力をたっぷりと湛えた排泄物は琥珀色の透明な物質へと変化し、それを口にした者に劇的な癒しの効果をもたらすという。
心優しきナコルルが病人や怪我人を介抱する為に用いていたその高尚なる力は、いまや地獄の門を開放する為の鍵として悪鬼共に利用されていた。
「うっ！…あっ！かはぁっ！…う、あぁ…も、もうやめて下さい…これ以上は…許してぇ…んっ！あぁっ！い、いやあぁっ！！」
ミツキの指先が白き巫女の恥ずかしい排便孔を再びなぞって施術を解除すると、限界を超えた便意がはちきれて、またもナコルルは思い切り息まされてしまう。
「んっ！はあっ！も…う…ウンチは…ウンチはいやぁ…くひっ！いっ！かはぁっ！ふ、うぅんっ！んひいいぃっ！！」
もはや自分の意思では肛門を閉じる事すらできない。噛み締めた白い歯の隙間から唾液の泡を噴きながら顔を真っ赤に上気させて渾身の力で腹筋を引き絞るナコルル。
仇敵の眼前で強制される排泄行為に変態露出マゾ牝に仕込まれた肉体が哀しく反応し、アイヌの美少女は膣口から愛液の糸を床に滴らせながら浅ましい脱糞快楽の絶頂へと駆け上がる。
ぶっ！ぶりりっ！ぶりっ！ぼりゅりゅりゅりゅっ！！どぶぶうぅぅっ！！
長さ5メートル以上はあろうかという長大な極太便が遂に全て吐き出された。見事なとぐろを巻いた腸液に光る魅惑のソーマはこの後、邪神復活の為に執り行われる儀式で最上の供物として祭壇に捧げられるのだ。
「か…は、ひぃっ！おっ…おうぅんっ！！」
ぷっ！ぷぴゅっ！ぷぴゅるっ！ぴゅっ！
まだ恥塊を放ち足りないのであろうか、ナコルルは排便エクスタシーの余韻にガクガクと身を震わせながらピンク色の肉輪と化した肛門から断続的に腸液の飛沫を上げ続けた。
長時間に及ぶ放便で乙女の糞孔は肉皺を消失させたまま完全に弛緩し、艶めかしく蠕動する直腸壁を外気に晒したまま閉じる事を忘れたかのように開ききっている。
「…あと一月もあれば儀式は完了し、冥界への門が開かれるであろう。世界が闇に閉ざされたその後、そなたにはこれまで以上の快楽を、淫悦を与えてやるわ、全く楽しみな事よ…ほほほっ！」
「い…やぁ…そ、そ、んな事…絶対…に…うっ！あ、ああっ！…ひあっ！アヒイイィッ！！」
グポリという音と共にミツキの拳がナコルルの肛穴に消え、そのまま指で直腸内に点在する

擬似淫核を引っかくようにストロークを始める。
理性が消し飛びそうなほどの快感に脳を灼かれ、被虐の巫女姫は頤（おとがい）を仰け反らせて喜悦の咆哮を上げた。
「ほれほれ・・・こうされると・・・ほほ、堪らぬであろう？・・・そなたの腸（はらわた）がわらわの腕をひり出そうと妖しく蠢いておるわ」
柔らかくもきつく締め付けてくる熱い腸壁の手触りが心地よく、ミツキは昂りに頬を赤く染めて拳を更に深く沈み込ませてゆく。
「はあっ！あっ！ひあっ！おっ！おひいいっ！！もうっ！もう、やめへくらひゃいっ！！やめ・・・おっ！おおおおおおうううっ！！」
たわんでいたS状結腸を真っ直ぐに引き伸ばし、下行結腸まで到達したミツキの拳から邪悪な波動が放たれる。消化器官を逆流する黒巫女の瘴気は少女の腸管内に設けられた幾箇所もの肉房に入り込み、そこに潜むおぞましき者達を胎動させた。
ぐるるっ・・・ぐぎゅるるるうううぅ・・・ごろごろごろっ・・・
「くふっ！うっ！ぐうっ！い、やぁ・・・私また・・・も、催して・・・うっ！んはあぁぁっ！！」
ここ数週間の間、ナコルルは邪神への供物を練り出す排泄奴隷としてだけではなく、邪教徒達の尖兵となる魔蟲の孵卵器としても利用されていた。
食料として与えられる腐乳餌には大量の蟲卵が混ぜ込まれており、胎内で孵化したそれは可憐な宿主の残便や腸液を啜りながらマムシの成体ほどの大きさにまで成長している。
ソーマを全て排泄したにも拘らず未だ大きく膨らんだままのナコルルの腹腔内で目覚めた妖蟲達は、ミツキの発した波動に呼応するかのように激しく蠢き、河を下り大海へ旅立つ魚の群れにも似た動きで出口へと殺到した。
「はあっ！・・・はあっ！・・・あっ！うくっ！・・・んあっ！だ、だめぇっ！！漏れちゃうっ！また・・・た、たくさん出ちゃうよおっ！！はひっ！・・・んっ！おおっ！おはああアアッ！！」
腸奥深く蹂躙していた拳を一気に引き抜かれ、便意が臨界点を突破する。懸命に息む少女の糞孔は周囲の肉ごと盛り上がり、真っ白な美尻の中心で大きく花開いた。
「くっ！・・・ふうっ！・・・あっ！・・・かはっ！ら、めぇっ！・・・んいっ！ひきっ！・・・やはぁっ！！あっ！うあっ！あハヒイイイイッ！！」
ぶっ！ぶりゅりっ！ぼりゅりゅりゅりゅっ！！ムリムリイッ！！ドボボボッ！！
菊皺を伸びきらせて裏返ったナコルルの肛門ははしたなく直腸肉までもはみ出させ、まるで木筒から押し出されるところてんの如く肉蛇の塊を搾り出し始める。
一升瓶をもゆうに咥え込めるであろう口径に拡張された括約筋が悲鳴を上げる中、アイヌの乙女は脳髄を貫く排泄快楽の魔悦に白目を剥いて悶絶した。
「ほほ、気持ちよさそうにひり出しおって・・・己の胎内で孵した蟲が国を滅ぼすとも知らずに幸せそうな事よ・・・このように愛らしい顔をいやらしく蕩けさせて・・・んふっ・・・んちゅるっ・・・じゅるるっ・・・」
連続絶頂に激しく痙攣するナコルルの頭を両手で挟み込み、ミツキは興奮を抑えきれずその口唇にむしゃぶりつく。体液にまみれた美少女のアクメ顔を掃除するように丹念に舌を這わせ、それらを美味そうに飲み下してゆく。
「んじゅるっ！・・・おふぉっ！・・・んほぉっ！・・・おっ！・・・おごっ！ほおっ！おふいいっ！イ、イクッ！！またイクウウウウッッ！！」
ドボボッ！ブリュリッ！ムリッ・・・ムリムリッ！ムリュリュリュッ！！ブボボボボォッ！！
下品な排泄音を轟かせ、苛烈な肛門出産に浅ましく悶え狂うナコルル。
狂艶の宴はいつ終わるとも知れず続くのだった。

（了）

～後書き～

この本を手に取り、購読して下さった皆様、どうもありがとうございました。深水直行です。
毎度の事ながら今回も自分が納得できるものとは程遠い仕上がりになってしまいました。前回の本よりページ数は増えたものの、その分絵が雑になってしまい、描き込みも足りないように感じます。
読まれた方で気になるところやアイデア等ございましたら、メールで教えていただけると幸いです。
そして今回、御多忙にも拘らずゲストで素晴らしい小説を書いて下さいましたhermit_gel様、本当にありがとうございました。
色々と注文をつけてしまってすいません、機会があれば是非またよろしくお願いします。ええ、もちろん次もナコルルネタで（笑）
いつも温かく応援して下さる皆さんに心から感謝します。
今こうして自分が同人活動を続けていられるのも、周りで支えてくれる人達がいてこそですから。
イベント会場で差し入れをいただいたり、メールで感想を聞かせてもらったりする度にその事を実感します。
会場で混み合った時に列整理を手伝って下さるイベントスタッフの皆様にもお礼申し上げます。いつも迷惑をかけてしまってすいません。自分で解決できればいいんですけど、いかんせん人数が足りなくてどうしようもないのです･･･
どうかこれからも甘えさせてやって下さい（笑）
それでは、次は春になるか夏になるかわかりませんが、また会場でお会いしましょう。

2005年12月22日　深水直行

～奥付～

発行誌名：JUNK7
発　　行：Chill-Out
発 行 者：深水直行
発 行 日：2005年12月30日
連 絡 先：fukami@mxc.nkansai.ne.jp
※この本は成年向けです。18歳未満の未成年の閲覧、購入を禁じます。
※この本の内容の一部、または全てを無断で転載する事を禁じます。

For adult only
FUKAMI NAOYUKI / Chill-Out Presents
Copyrigth (C) 2005 FUKAMI NAOYUKI / Chill-Out
All right reserved
Printed in japan